

福島区歴史研究会 会報

第十九号

2026. 2



目次

吉川禎昭氏追悼記・・・・・・・・・・岡倉光男	2	二〇二五年を振り返って	
戦国時代・天文前期の野田村考		―万博、セミナー講師、宮座神事など―・・末廣 訂	27
―「石山本願寺日記」と圓満寺・		AIが拓くこれからの郷土史研究・・・・・・・・藤 三郎	31
春日神社所蔵史料から読み解く―藤 三郎	3	ヘトピック 藤庵の碑の銘板が・・・・・・・・・・	32
【はじめに】		講演会 高瀬善方氏が語る会・・司会・記録・・宮本隆正	33
一 畿内を取り巻く情勢		堂島川と文人たち―堂島川を往来した文人官吏	
二 一向一揆に参戦した野田福島衆		二〇二五年第一回セミナー報告―	
三 一連の合戦が後世に与えた影響		・・・・・・・・・・・・・・・・澤田耕作	42
【まとめ】		歴史と水郷の村 海老江	
田辺聖子と戦争体験について・・・・・・・・多田一夫	18	―二〇二五年第二回セミナー報告―	
「区の花・のだふじ」はコンテンツツーリズム	21	・・・・・・・・・・・・・・・・藤田由紀子	46
二〇二五年万博あれこれ・・・・・・・・村尾清一郎	22	大阪の歴史と古道	
二〇二五年大阪・関西万博見聞録・・・・・・・・藤 三郎	24	―二〇二五年第三回セミナー報告―	
		・・・・・・・・・・・・・・・・中堂眞理子	48
		〈写真〉大阪市場線最後の日 さようなら「ぎんりん号」	49
		福島区歴史研究会会則・・・・・・・・・・	50
		2025年の事業・2025年の活動記録・・・・・・・・	52

吉川禎昭氏追悼記

岡倉光男

さだあき

吉川禎昭氏は、以前から食道癌の持病があり、近年少し弱られて「海老江記念病院」に二〇二五年一月六日に入院、治療に専念中、同三月三十一日、幽明境を異にされました。享年八一歳。

葬儀会場 ベルコロイヤルシティホール野田

喪主 吉川和宏氏（長男）

通夜 四月三日 一八時

葬儀・告別式 四月四日 一〇時二五分

出棺 大阪市立北斎場 一二時 火葬場入場

本会（福島区歴史研究会）の古参会員であり、宮本会長指示・大垣事務局長差配で、祭壇に供花する。ごく内輪でと聞かされていたが、会員数名が焼香を上げ、遺体に手を合わせた。

市岡高校第一四期同窓会の世話人、県立和歌山大学経済学部卒、以前本会のセミナーでは、地元のお地蔵さんをテーマに、玉川コミニティセンターで講師を勤めた。初期のセミナーの世話人として、尽力された。

近年、研究会の会合は、お仕事Ⅱ㈱丸二商会（店名ホームテック玉川）が忙しく殆ど欠席されていたが、二〇〇七年十二月一〇日、

福島一丁目の、中津藩蔵屋敷跡、福澤諭吉誕生碑復元式に際しては、立ち会い参拝の慶応大学OBの方々と懇談・交流されていて、吉川氏の視野の広さと見識に感心。そして当時、市議員でもあった太田勝義会長と帯同、福島区歴史研究会々員として、対応に益されていたのが印象に残っている。

また福島区役所蔵の、明治初年の「くずし字」で書かれた古文書を読むに際して、氏知人の某大学の教授に依頼して読解して頂いた時も、その人脈の広さに感心したことがある。

自営の電気店は、お父上が、恵美須神社南出入口前、銭湯「宝湯」の向って右隣に、大正七年（一九一八）に創業、その後扱う商品種類が増え手狭になったので、戦後、昭和二〇年代初期に、ガレージ付きの二倍ほど広い現在地に引っ越された。大正七年と言えば、偶然とは言え「松下幸之助」氏が東成郡猪飼野から引っ越し、大開町で長屋の端の一軒で、創業したのと同じ年になる。

会員の原稿を

募集します！

福島区の記録を

残しましょう

戦国時代・天文前期の野田村考

―「石山本願寺日記」と圓満寺・

春日神社所蔵史料から読み解く―

藤 三郎

【はじめに】

戦国時代の野田村が一向一揆に参戦していたことは、『なにわ福島ものがたり』註1に記した。これは「石山本願寺日記」(『私心記』(順興寺実従著)、『天文日記』(本願寺証如著))と圓満寺・春日神社に残る史料をヒントに書き下したものであるが、この度、野田村が一向一揆にかかわっていた部分のみを切り取り、原文を引用し、その後判明した史実を付け加えながら見直した。

ただし、これら史料のみでは何が起こっているかわからないので、『細川両家記』註2、『一向一揆論』註3(金龍静註4)その他も引用した。

註1 『なにわ福島ものがたり』(福島区歴史研究会 二〇一二)所収

藤三郎執筆 「二十一人討死」の合戦と一向一揆

註2 『細川両家記』にはいくつかの写本があり、ここでは『細川家

記録』永源附録 五冊の内を使った。

註3 『一向一揆論』金龍静 吉川弘文館 二〇〇四

註4 元本願寺史料研究所・副所長。円満寺(北海道)住職

一 畿内を取り巻く情勢

まず畿内が戦乱に巻き込まれていく過程を簡単にまとめた。

◇応仁の乱(応仁元年・一四六七〜文明九年一四七七)・・・この段階では野田村は平穏だったと思われる・・・

◇明応の政変(明応二年・一四九三)

応仁の乱時の西軍の大将・細川勝元の嫡男で管領・細川政元が十代將軍足利義材をクーデターで追放し、一代將軍・足利義澄を擁立し幕府の実権を握った。この下剋上により全国的に戦国時代に入った。

◇細川二流の始まり

政元は修験道に懲り(こ)女人禁制としていたので子供がなく、九条家から養子を迎え細川澄之(すみゆき)とし、自分は隠居してしまった。さらに武家の棟梁が公家の出とはいかがなものか、ということとで阿波細川家からも養子を迎え細川澄元註5と名乗らせ正式の後継者とした。

◇永正の錯乱(永正三年・一五〇五)

これに恨みを持った澄之方の香西元長の間者によって政元は入浴中暗殺された。その澄之は澄元によって殺害され、澄元は細川京兆家の家督を継いだ。こうして、その後二〇年に及ぶ細川京兆家註6の家督争いが始まった。

◇細川高国政権の成立

野洲細川家から、澄之の後継を名乗る細川高国が現れ、国に

追われていた足利義材（のちの義尹）^{よしき}を奉じて上京した大内義興と通じて、將軍・足利義澄と細川澄元を近江に追放した。等持院の合戦（永正一七年・一五一九）で三好之長が処刑され、澄元も阿波に逃れた。こうして細川澄元に連なる勢力が畿内から一掃され高国政権が成立した。

◇堺幕府（擬似幕府）の成立

大永七年（一五二七）、「桂川原の合戦」で波多野・柳本・細川六郎（澄元の子でのちの晴元）の連合軍に敗れた高国は諸国流浪を始め、將軍足利義晴は近江の朽木に逃亡した。晴元は足利義澄の次男（長男？）義維^{よしつな}を次期將軍に見立てて堺に幕府を開いた。いわゆる堺幕府である。

◇天王寺合戦（享祿四年・一五三一）

浦上村宗・赤松政祐の播磨の軍勢を率いて高国は京都奪還を目指し、細川晴元・三好元長の連合軍が天王寺を挟んで迎え撃った註7。しかし合戦の最中に赤松氏の裏切りにあい高国方は大敗し、高国は尼崎で自害した。（「摂州の大物くずれ」）

◇享祿の錯乱（大一揆・小一揆）

享祿元年（一五二八）高国が没落したすきに、本願寺の坊官・下間頼秀が、藤島超勝寺・和田本覚寺（大一揆側）と共に越中の高国領を侵犯したことに始まる。しかし高国が上洛してきたことに力を得た先代の実如につながる加賀の三ヶ寺（小一揆側…若松本泉寺・松岡寺・光教寺）が守護の富樫氏と共にこれに対抗し、大一揆側を白山のふもとに追いやった。ところが「天王寺合戦」で

高国があっけなく敗死したため、享祿四年（一五三一）本願寺（大一揆）は小一揆討伐に乗り出した。下間頼秀註8・頼盛兄弟は、東海・美濃の門徒を動員して小一揆を打ち破り富樫氏を能登に追放した。こうして本願寺は加賀一国を事実上支配下におさめた。

◇堺幕府の崩壊

細川晴元と三好元長（長慶の父）の間で亀裂が生じた註9。軍事力で勝る元長を討つため、晴元は本願寺・証如に援軍を要請した。

◇享祿五年六月五日夜、証如は山科から、内衆を引き連れ大坂御坊に駆け付け、一揆の総指揮をとった。

◇同年註10六月二〇日、証如は五万とも一〇万ともいわれる大軍で堺・顕本寺で三好元長を攻め切腹させた。こうして「堺幕府」はあっけなく崩壊した註11。この時、証如は自ら陣頭指揮をとったとされている（『大阪府史』）。勢いを得た一向一揆は各地で武家の城や屋敷を攻撃し始めた。これに対抗するため晴元は、今度は法華宗に援軍を依頼した。こうして畿内天文の一向一揆（一向法華の乱）が始まった。

◇「畿内天文の一向一揆」（一向法華の乱）勃発

はじめは本願寺が有利に戦いを進めていたが、八月二日茨木長隆は、京の法華宗各寺院に次のような奉書を出状した（『大阪府史』）。

本願寺のこと、別儀なき旨申さるゝといえども、一揆など

恣なる動き、造意歴然なり。 ほしいまま しかる上は、諸宗滅亡この時たるべきか。所詮、当宗中この砌相催され、忠節をぬきんでらるればご快然たるべきの由候なり。よって執達件くたんの如し 享禄五年八月二日（茨木）長隆（花押）

これにより法華宗が晴元側についたため戦況は逆転、本願寺側は負け戦が続く事となった。

註7 この時、浦江・野田城が播磨勢の拠点となった。

註8 下間一族は常陸の国出身の武士でから蓮如上人以来、代々の宗主に付き従ってきた本願寺の坊官で内衆。頼秀は軍事部門を率いていた。若いころの証如の奏者役をつとめ、証如に多大な影響を与えたといわれる。

註9 通説では三好宗家の地位をうかがっていた三好政長や木澤長政の讒言によるとされている。晴元・元長間で將軍跡目をめぐる意見の対立も原因とも考えられる。

註10 七月二十九日「享禄」から「天文」と改元。

註11 三好長慶は前日、阿波に逃れ無事だった。

二 一向一揆に参戦した野田福島衆

(1) 証如と野田衆の關係が良好だった時代

山科本願寺を守っていた順興寺実従の日記「私心記註12」には次のように記されている

◇天文元年八月四日 木澤（長政）打出候。六郎（細川晴元）このほうに對し敵をなす

◇五日 合戦 大阪衆明祐めいゆうなど討ち死に

◇九日 南方（別の条で“宗主在所”との説明あり）において合戦 東兵衛大など討ち死に

◇この日、福島区で知られている「二十一人討死の合戦」註13があった。

この出来事は、『圓滿寺縁起』に残るように、大坂本願寺（大坂御坊）を守っていた野田福島衆の門徒が、陣頭指揮をしていて危地に陥った証如を、一時野田村に避難させたというのが真相に近いと思われる。野田衆に助けられた証如は、後に「野田御書」と名付けられた宗主感状を書いた

野田御書



（玉川）春日神社所蔵

（書き下し）野田惣中へ 証如
今日のかつせんに廿一人
うちしにのよしいた
はしさせひにおよは
す候しかれとも
しやう人の御かたを申
され候たのもしくあり
かたく候うちしにの
かた々々はこくらく
のわうしやうとけられ
候はんする事うたかい
なく候 いや々々ちさうた
のミ入候 此よしうちしに
のあとへもつたへられ
候へく候
あなかしこ あなかしこ
八月九日 証如（花押）
野田惣中へ

野田御書



圓滿寺所蔵（大阪市指定文化財）

（読み下し）野田惣中へ 證如
今日の合戦に廿一人討死にの
由、勞しき是非に及ばず候、
然れども聖人の味方を申さ
れ、頼もしく有難く候。討死
の方々は極楽の往生とけられ
候はんする事疑い無く候。い
よいよ馳走頼み入り候、この
由、討死の後へも伝えられ候
べく候、
あなかしこ あなかしこ

八月九日 證如判
野田惣中へ

「野田御書」の謎

「討死の御書」ともいわれる。討死した門徒の子孫に対する宗主感状である。

◇この文書には日付けはあるが年号がない。後世の人々は、六角定頼と法華衆によって、天文元年八月二三日に焼き討ちにされた山科本願寺から証如が野田に逃れてきたと考えた。故にこの出来事は天文二年八月六日とされているが、当時の情勢と証如花押の形から見て天文元年八月六日が正しい。

（つづき）

◇一揆に参加することは、親鸞聖人に対する報恩行であるので、討死にした門徒に対して、感状は書かないのが本願寺の慣例である。書いてはならないのである。従って討死にした門徒に対する宗主感状はこれ以外にないといわれている。すべて偽物である。よほど特殊な条件下で書かれたのであろう。証如は、なぜこの時に限って宗主感状を書いたのか、謎である。

◇常州水戸城下馬喰在住の野田玄貞方、「（美濃）徳光村長源寺」その他計一通の写しがある。通常原本があれば写しは必要ないので作らない。写しが多いのも謎である。

◇春日神社にも証如自筆の原本がある。花押の形から天文二年と推定されるがそれも謎である。

【史料】

「圓滿寺縁起」抜粋

（前略）天文二年巳八月九日、敵勢三千余騎不意におそい来つて、一参に責め立てる。今は石山勢も防ぎ難く、上人の御命も危うきにせまり給う。野田福島の御門下五百余人勢を揃え、石山へ籠城しけり。（中略）依之、上人を怪しき姿に成し奉り、御真影は念仏の久左衛門に背をわせ、上人は藤三郎左衛門と云う剛力の若者御手を取り御門末前後を守護して、難なく野田に移し奉る。（中略）敵軍分逆の余り野田の民家へ火を放つ。一時に焼失せり。今日の合戦卯之上刻に始まり、敵味方手負い数を知らず。別して野田の御門下廿一人、今の生害橋の地にて討死せり。此の由、船中へ言上におよびければ、（中略）御満悦の余り御箭立を取り船中に於いて御書御染筆遊ばされ討死の跡へ下したまいけり。（後略）

その時、証如は？

福島区内に残る伝承では、「圓満寺縁起」を除いて、証如は野田村を訪れていたところを六角定頼に襲われたとされるが、これらはすべて後世の創作である。本願寺宗主は、本願寺から外に出ないのが当時の習慣であったから（金龍静々藤・私信）野田に來た訳はない。定頼も野田まで証如を追ってくる訳もない。証如は歴代宗主の中で、唯一一揆の陣頭指揮をとった宗主と言われる。堺の顕本寺襲撃事件の時も陣頭指揮をとった（前出）。「二十一人討死の合戦」の時も、証如は陣頭指揮をとっていた可能性が高い。『圓満寺縁起』に描かれているように「野田福島の御門下石山へ籠城しけり」が実態に近いと思われる。

『藤伝記』から抹消されたが「記憶」に残っていた三郎左衛門

圓満寺縁起の三郎左衛門は実在したのか？ 伝説上の人物とも考えられる。「藤伝記」の「本願寺騒動」の条には出てこない。しかし江戸時代半ばに、本願寺に申し述べたとして、次のような覚書が残る。

付箋 此度お届け奉申上事本願寺門跡 津村御堂留主居 渋谷左仲

宝延二年巳（一七四九）

藤之家祖先より代々名字相続故先年之頃より

名字 藤 宗左衛門

藤 三郎左衛門

此三郎左衛門義ハ地頭役人差支へ合戦之町筋也

右三郎左衛門義本願寺記ニ有之

へつづき

一揆に参戦していたことを「記憶」していたことがわかる。しかし『藤伝記』に「記録」としては残さなかった。（過去帳には「真庵 天元酉十一月十五日往生 同式百二十年也 此真庵俗名者三郎左衛門 以前天文二年八月九日、二十七才の時証如上人様御身方申也」とある。）江戸時代の野田村の人々は、祖先が一向一揆に参戦していたことを隠していた。一揆は反体制活動だからである。これは「二十一人討死の合戦伝承成立過程の研究」（二〇二四年『会報17』で検証した）。

実は三郎左衛門の名は、昭和の時代まで記憶されていた。筆者の母親は「祖先に三郎左衛門という偉い人がいたんですよ」と言っていた。しかし一向一揆で戦った門徒ではなく、江戸時代中頃の「藤家中興の祖」と思っていた節がある。そして筆者を「三郎」と名付けた。真偽のほどは定かではないが、特に否定する材料もないので、ここはそのままにとどめておく。

——山科本願寺焼失——

同年八月二十四日 当時本願寺の総本山だった山科本願寺が法華宗・六角定頼の連合軍によって焼き討ちされた。

【史料】

山科本願寺焼失

『私心記』

天文元年八月二十四日

朝早々より諸勢取出候。取り回し責め候、四時也。昨日より今日にいたるまで、城中静にして強也。然るところ兵庫之介和睦の扱いとして人質に出、源次郎（融慶）内へとる時、諸勢水落ちより乱入して、火をかけ候間、一時之間に、寺中御坊など焼失候。予・丹（丹後守頼玄カ）御堂庭にて討死すべき覚悟の處、諸勢打ちよせざる間、六時に落ち行き候。勧修寺五郎左衛門宿へ行く。それより上の醍醐へ行く、水本坊（報恩院）へ夜明け候時分に参り候。

【解説】 一揆の目的は何か？

この記述からわかるように、一揆勢は必ずしも敵の殲滅を目的としていたのではない。一揆勢は生き残りの敵には目も向けず財宝の収奪に走っている。このように一揆の目的は、敵を殲滅することではなく、敵の財宝を奪うことが目的だった。他の一揆もおおむね、荊田、略奪、濫妨、狼藉、放火を伴っていた（『雑兵達の戦場』など）。

―野田衆・三好伊賀・久助の造反に加担した―

天文三年六月五日三好伊賀・久助このほうに來り候。野田陣取り候。見物に行く。（『私心記』）

↓三好家の重臣・三好伊賀守は、細川晴元を裏切り本願寺に寝返った。理由は全くわからない。

◇その後下間頼盛が激励に行き、証如は祝いの酒樽を贈っていることから本造反は本願寺が支援したことは明らかである。

◇同年六月二十五日源八、三好方、其の外諸勢棕橋（豊中市）へ陣取也。長柄にて見物也。棕橋へ敵取籠候を追い落、入城也註14。

（『私心記』）

◇『細川両家記』には次のように記されている。

八月十一日註15、三好伊賀・久助本願寺に同心して晴元に敵対す。則ち棕橋城に籠る。

↓三好伊賀・一揆連合軍は棕橋城を攻略し対晴元との数カ月にながぶ合戦の拠点とした。

この時野田福島の間徒も援軍として戦ったと考える。これは次の史料にもとづく。

◇七月二十八日御齋、野田・福島より被申候。（『私心記』）

↓この一文が、“野田福島衆が直参門徒”に取り立てられた証左である。棕橋城攻略の戦功を認められたと考えられる。

【解説】 直参門徒

直参門徒とは、宗主と直に話ができる門徒である。宗主との個人的なつながりや経済力の他に、証如のこの時代は戦功を立てることが直参門徒の条件だった（『一向一揆論』金龍静・藤・私信）。武士は戦功を立てると主君から領地が与えられるが、本願寺には与えるべき領地はない。役務を軽減すると教団内部の地位が下がる。教団内の地位の向上、特に直参門徒になることが最高の恩賞であった。

『私心記』の「野田」は何処の「野田」か？

大阪府には、西野田（福島区の野田）・東野田・高槻の野田・豊中の野田と、四つの野田がある。「高槻の野田」は細川晴元が居住する芥川山城のふもとで、ここで挙兵出来るわけもない。「東野田」は狭い地域であり、この2か所は論外とする。棕橋城と地理的に近い「豊中の野田衆」であるという説もある。しかし「豊中の野田衆」が棕橋城を攻め落とし、関係のない西野田の野田衆が直参門徒に取り立てられ、さらに絵像本尊を下賜されたという荒唐無稽な話はいらない。また棕橋城は、いざというとき「豊中の野田」の人々の避難所でもあったはずであり、豊中の野田衆がここを攻めるわけではない。一方、西野田は南中島の端に位置し、晴元側に知られることなく兵を募るには格好の場所であったし、人口も一番多く兵を募るにも都合が良かった。「野田御書」もある。『私心記』の野田は「西野田」以外にはない。

『私心記』・『細川両家記』等に、三好伊賀・久助と一揆勢のその後の活躍が記録されている。

◇八月十一日 棕橋にて伊丹衆（晴元の党）と合戦。大勢敵打ち取り候也。『私心記』

◇八月二十九日 棕橋へ行く。川にて網引き見物。民少より餅。飯など持たせられる。『私心記』

◇十月十七日 三好千満丸（実休）も阿波から援軍に駆付け（出展不詳）、三好伊賀が優勢となった。

◇十月十九日 三好甚五郎（三好政長）難太（灘？）に入り候を押し寄せ焼候。棕橋より民部少輔・伊賀・久助など出陣候。『私心記』

◇十月二十日 摂津国下郡難太註16また合戦。三好伊賀・久助出候。この方の衆も出で候。甚五郎（三好政長）追失候。難太悉く放火候て敵数百人打ち取り候。『私心記』

◇二十日 伊丹・池田衆・三好神五郎と示し合わせ三伊・同久助を囲みける。然らば伊賀・久助潮江庄田中にて合戦アリ。一揆衆も取り出で伊賀・久助陣所え加わる。然れば伊賀・久助切り勝ちて伊丹衆・甚五郎衆六十打ち取る也。この以後兩人を伊丹と木澤左京之介あつかいにて晴元に召し返され候也、一は是も大坂に軍勢の約束とも相違によってなり註17。『細川両家記』註18）

謎の武将・三好伊賀

『細川両家記』などの軍記物や『私心記』で、「三好伊賀」や「三伊」の名前で活躍する武将は一体何者か？

◇天野忠幸氏によると、三好伊賀は本名・三好伊賀守連盛つらもつで三好長慶の重臣である。若いころの長慶の後見人とされているが、三好氏の家系図には出てこない「謎の武将」である。尼崎の代官で、のち三好家を追放され堺で牢人し、八尾で親子共々討ち死にした。

◇天文八年十月九日三好伊賀牢人之。堺に在津。為音信、三種三荷以芝田遣之。『天文日記』

◇三好伊賀は長い間三好長慶と同一人物とされていた（『人物叢書・三好長慶』、長江正一）が、最近、天野忠幸氏の研究によって両者は別人であることが判明した。

筆者は、本研究開始に当たり「三好伊賀が歴史上の人物の誰に当たるか？」を、三好長慶会会長・出水康夫氏に問い合わせると、長慶であると示唆されたので『なにわ福島ものがたり』ではそれに従った。

後日、「三好長慶会三〇周年記念誌」に投稿するにあたり、天野忠幸氏に査読をお願いしたところ、三好伊賀と長慶は別人である旨指摘され、その部分は削除した。『天文日記』・『大館常興日記』の天文八年六月～一〇月の条を精査すれば、別人であることが容易に分かることであるが、当時はそこまで至らなかった。ここに改めて訂正させていただきます。

◇十月二十五日 民部少輔西宮へ行かれ候。放火合戦アリ。得勝利候。三好伊賀・久助同前。甚五郎（三好政長）腰水（西宮）にあり。『私心記』

◇十月末、潮江庄の合戦で大勝し、交渉の主導権を握った三好伊賀は、晴元の元に帰参した。同じころ長慶も晴元と和睦した。



圓滿寺所蔵 裏書

「本願寺釈証如天文三年十二月

二十五日 撰津国西成郡中嶋野田惣道場物也」

（大阪市指定文化財）



【史料】 野田惣道場に証如から下賜された「方便法身の阿弥陀如来像」

本願寺は一連の合戦で劣勢を挽回したので証如は大いに喜んだ。天文三年十二月二五日付で本願寺証如から野田惣道場に下賜された「方便法身尊形」の阿弥陀如来像はこの一連の戦功として下賜されたものと考えられる。通常の絵像本尊より法量が大きい。元号日付が入っていることから公式文書と認められる。

その後も戦乱は続く。以下『私心記』より。

天文四年七月二十八日 御齋、野田・福島より・・・

↓野田福島から親鸞聖人の法要に上山。

◇同年九月十四日 暁、筑前（下間頼秀）寺中退出候。昼、備中（下間頼盛）退出候。兵部太夫源次退出候。備中は雑説によれば有御機（氣

この時長慶は？

この頃の長慶の動向はほとんどわかっていない。木澤長政・叔父の三好政長の讒言により、享禄五年（天文元年）六月二〇日、主君・細川晴元の依頼によつて本願寺証如に攻められ、父・元長が堺の献本寺で切腹してから二年、長慶はまだ一二歳であつた。

天文三年六月五日、三好長慶の重臣であり若いころの後見人と目される三好伊賀守連盛が、細川晴元を裏切つて、本願寺側に寝返つた当時、長慶は、父の敵、細川晴元・木澤長政・三好政長のもとにいた。このような状況下で一人取り残されていたことは考えにくく、三好伊賀の一团の中に潜んでいたのではないかと想像されるが記録にはない。

（１）『一向一揆論』の中に、天文三年一〇月ごろ、晴元と長慶が和睦したとの一文がある。長慶と晴元の和睦の時期が、連盛が晴元に帰参した時期と重なること、

（２）長慶の弟・千満丸も阿波から救援に駆け付けたこと、

（３）十一月二日に、連盛と長慶が連署して起請文を書いている（後述）ことからこの頃、両人は行動を共にしていたことは確かである。以上の微証から連盛の造反に長慶の存在を感じさせる。

カ) 遣り、御暇申候て披申候て披出候云々。

↓畿内天文の一向一揆の本願寺の主戦派・下間頼秀・頼慶兄弟が本願寺から追放された。これで晴元との和議の条件が整った。

「畿内天文の一向一揆」は天文四年秋、證如・晴元間で和議を結び終結した。これは本願寺側が晴元側に和解金を払った事実上の敗北であった。以後証如が一揆にかかわることはなかった。

「釣り野伏せり」戦法

「尼崎潮江庄の合戦」では、三好勢は「釣り野伏せり」戦法をとったとも言われる（出典不詳）。合戦中に農民軍が突然現れた（『尼崎市史』、一揆衆も取り出で伊賀・久助陣所へ加わる『細川両家記』。一揆勢が突然現れたのを「釣り野伏せり」戦法と見立てたのであろうか。特に否定することもないし面白いので採用した。

本隊が負けたふりをして退き、そこに伏兵が突然攻めかかるという戦法である。これは島津軍の得意とする戦法で、秀吉の九州平定の前哨戦「戸次川の合戦」・天正一四年で、戦国三好一族で最後まで生き残った武将・十河存保が島津軍を追って冬の戸次川を渡ったところを、潜伏していた島津の大軍に襲われ全滅した。秀吉がつけた軍監・仙石久秀が功を焦ったため、無理な渡河作戦を強いられ島津軍の罠に落ちた。

(2) 証如と野田衆の関係が破綻した時期

―「中島の乱」勃発・野田衆も参戦―

「畿内天文の一向一揆」が終結した翌年、天文五年三月に、またまた騒乱が勃発した。

◇天文五年甲午三月二十六日に中嶋一揆衆・富田中務なかつかさ（知信？）

一味して西難波（JR立花駅（尼崎）の南東）に、伊賀・久助盾籠るを責め落す也。長屋・岸本腹切りぬ。四十ばかり討死にす。然れば伊丹衆立て籠る須屋の城もあくる也。同棕橋城伊丹守も明くる也。然れば木澤左京之介を頼り信貴山城へこされける也。

（『細川両家記』）

「中島の乱」

天文五年三月二十六日、前年秋、本願寺を追放された下間頼秀・頼盛兄弟は、細川高国の弟・細川晴国を大将格として一揆勢を率いて乱を起こした。「中嶋の乱」とも呼ばれる（出展不詳）が、小規模であったので一般の歴史書には出てこない。天文五年七月二十九日、木澤長政・三好政長・同伊賀等諸国の軍勢によって鎮圧された。大将の春国は八月二九日天王寺で切腹、頼秀は天文六年三月二〇日、近江の国で、頼盛は天文八年七月二一日に堺で証如の刺客によって誅殺された。ここでは「中嶋の乱」という名称を使った。野田衆を筆頭とする中嶋八力村もこれに加担し証如に破門された。一向一揆には本願寺が主導した一揆と、門徒が暴発した一揆があるといわれる。三好伊賀に率いられた一揆は前者に、「中嶋の乱」は後者に属する。野田衆はその両方に加担したといえる。

以下『天文日記』より

◇天文五年六月二十二日 晚景七時、丹後（下間頼玄）法眼中嶋福島にて往生。（『私心記』）

◇天文五年七月二十一日 中嶋衆八人來り候。此のうち一人野田之者也。然る物座敷を立候て候。其の余七名の衆網所（あみところ）にて上野して嶋扱いの儀申し付け候て、むぎ上野（下間頼慶カ）相伴にて酒すすめ候。この中嶋衆は此の間連々呼びても來たらず候て、只今來たる事候。何も何も申す事大方之儀書之。

◇二十三日 中嶋衆來たり候て、惣の一筆持參候。此の儀は此の方よりこい候。其の内に五千足なりとも萬足たりとも、就扱い之儀大儀たるべく候間、到來すべきよし申し候。返事には右申す通り分別してと申し候。

◇二十五日 中嶋衆來たり申す事には契米などを可出。所領にはかわらざるよしなど申し候。此の通り若井に申し聞かせ候へば、木澤に被仰聞候とも承引有まじく候。

◇二十六日 従只今中嶋衆喚遣候へば、丑刻に明日惣中寄合の間ひる可參由返事候。

◇二十七日 中嶋衆今日一日相待ち候へとも遂に來たらず。

◇二十八日 今朝若井歸り候ニ、木澤方に申す事には、連々中嶋衆之儀申す扱候といへども、不承引き候。然れば木澤にたいし失面目候。然る時中嶋衆放門徒候と申し候へとも、若井申す事には、放門徒と申す事尤もに候へとも、上野まで申す事に左様にあらざとも木澤前のきは涯分可申候。

↓中嶋衆は証如の仲介を聞き入れず、木澤長政に対し面目を失った証如は中嶋衆を破門した。

◇七月二十九日 後刻木澤中嶋に入り候。即時に遂其節候て驚目候。少ほどして入嶋珍重の由、木澤方へ以藤井申し遣候。（以上『天文日記』）

◇天文五年七月二十九日 木澤、山中典厩等その他諸国之猛勢にて上手堂へ陣取り、中嶋へ川を渡り責め入り候。大勢討ち死に候。中嶋中悉く焼候（『私心記』）

◇武士衆木澤左京之介・三好伊賀・同神五郎（政長）一味同心して大坂へ案内あり。中嶋へ討ち入り、一揆衆負けて八百人註19計切り捨てるといふなり。一揆方の城悉く落ちるなり註20。（『細川両家記』）

◇「寄せ手は騎馬武者多して、一揆は徒士たち（『続応仁後記』）」で、一方向的な合戦であった。

↓本願寺の庇護を失った中嶋に諸国の軍勢が攻め込み八百人ばかり切られ中嶋中が焼け乱は終結した。

◇三宅出羽守国村、大阪本願寺一味にて細川八郎殿晴国と申を呼び入れ申し候といへ共、世上この分に成り行き間、八月二十九日の夜半に晴国を堺津に落ち申し由候て、天王寺にてお腹めさせけるとなり。我はまた晴元に帰参也。然れば細川の行流一旦に相果候と申候也。（『細川両家記』）

◇「大物崩れ」で切腹した細川高国の弟・晴国も切腹し、これで「細川二流」は解消した。以後、細川晴元の畿内支配は、「江口の合戦」（天文一八年・一五四九）まで続いた。

【解説】 野田衆はなぜ「中島の乱」に参戦したのか？

野田衆は、畿内天文の一向一揆終結後も何故乱の継続を望んだのか。平和がいいのに決まっているというのは現代人の常識。しかし、『私心記』に記録された山科本願寺落城の状況のように、一揆の目的は、相手方の財産を根こそぎ奪うことにあった。戦国時代の庶民にとって「戦場は稼ぎ場」であり「戦争は一種のビジネス」であった『雑兵達の戦場』など。戦国時代の野田・福島衆にとって戦場は稼ぎ場所であったと考えられる。

謎の中嶋八人衆

この中嶋衆八人は何者か？ 筆頭は野田衆であることは明らかである。

中嶋とは、大川・神崎川に囲まれた一帯で、東淀川区・北区・福島区・此花区・西淀川区・淀川区付近とされる。

しかし江戸時代に編纂された『摂津志』巻二十東成郡、鶴見村の項に「榎並・横堤は古ハ中嶋の庄に属セシト云フ」とあり榎並・横堤が中嶋に属していた伝承を伝えている。『本願寺史料集成第一巻』『天文期摂津門徒の動向』には「摂津国中嶋」内門徒として、榎並衆・横堤衆・野田衆・福島衆が一体的に行動していた。戦国時代は中嶋の定義はいまいで榎並・横堤は、中嶋の周辺に位置するので宗教的に中嶋に属していたと考えられていた(AI)。故に天文日記(日時不詳)の中嶋八力村の注釈に「野田・福島・榎並四力村・横堤」とされているのでそれを踏襲した。

(つづき)

(1) 野田福島以外は中嶋ではない」との尤もな意見が寄せられたので、『天文日記』をもう一度見直してみると、榎並四力村はこの乱には参戦していないことが次の一文からわかった。

「天文五年七月二十八日 齋 善源寺・滓上江・放出・辻
從此四ヶ所如毎年可令勤仕由申候て、三貫ならびに白米一
石到来候。前々は中嶋野田衆も入り候へども当年は此方申
す事相背候間、不及是非候。」

〈2〉これに対し「中嶋五力村(海老江・野里・三番(定専坊カ)・幣嶋・大和田)に新たに野田福島が加わったのではないか」との意見がある。確かにそれで矛盾はない。しかし、「中嶋五力村」は天文五年四月一日に証如から赦免され、早々に戦線を離脱していることが、次の一文からわかる。

「天文五年四月十一日 中嶋五力所の衆(海老江・野里・幣嶋・三番・大和田)去年より種々依申何の色ハなく候へとも武客に候と談合中より被申候條、今日上野(下間頼慶カ)坊主々々へ可申届申出之。此の在所の衆は皆赦免候。」

(つづき)

(3)『戦国遺文 三好氏編』第一卷 No. 71、宝珠院文書五卷⑦二号(AI)

起請文

一 於長洲莊野地・前田之事、以後不致非法事。若違背之条、可蒙神罰者也。仍而起請文如件。

天文三年十一月二十一日 三好伊賀守(花押) 三好千熊丸(花押なし) ……【原文はもつと長い】

【現代語訳】 長洲莊のうち野地・前田の両地について、今後いかなる不法・横暴の行為もいたしません。もしこの誓いに背くことがあれば、神仏の罰を受けるものといたします。よって、ここに起請文を差し上げます。

「長洲」の地名は、尼崎潮江の南・大物の北に位置するー現在のJR尼崎駅の南ー。

AIによると「野地」は現在の「野田」、「前田」は「御幣」と比定される、長洲庄は尼崎から野田に至る広大な莊園であったという(疑問)・・・『日本地名大辞典』では「野地」は尼崎市長洲・金楽寺とされている・・・

この起請文から、野田・御幣(海老江・野里・三番・大和田)は一体となつて動いていた可能性が浮上したが、よく調べるとAIの誤認であることがわかった。参考までに紹介した。

以上より、現時点では中嶋八人衆は、特定できない。「筆頭が野田衆である中嶋八力村の代表者八名」にとどめ、後世の研究に待ちたい。

(3) 証如と野田衆が和解した時期

◇天文七年七月二十五日 為来二八日頭料、白米一石、三貫、自辻・善源寺・滓上江・放出来候。中嶋野田加わらず候間、代すくなく候。

・野田衆はかつて多額の頭料を上納していたことがわかる。

◇天文七年十二月十六日従木澤、中嶋門下事はや三カ年成候間、赦免候様上野得其心可被露由書状到来候。

◇十七日 木澤へ、中嶋衆事先に上野返事申させ候。其由者被申候通尤可然候。其趣披露候へば、申出之段無承引、曲者の由此方申候計候。纏て又此の儀以書状被申候はば可然候。其の時涯分可申聞之由返語させ候。

◇二十六日 中嶋門下事木澤へ、各曲事二候へ共余二申條、得其意由、申し遣り候。此の段昨日自中坊又申来候間、此分候。中嶋へ、令赦免由、申し遣り候。

◇天文八年正月八日 中嶋門下今日悉来候。

赦免された中嶋衆

破門されると、赦免されるまで最低五年、普通は一〇年から一五年かかる。加賀の小一揆側の三カ寺のように永久追放ということもある(金龍静々藤・私信)。一年半という異例の速さで赦免されたのは「野田御書」の効果もあったであろう。それにしても証如の中嶋衆(文面から「中嶋衆」とは「野田衆」を指している)への内心の用心ぶりが読み取れる。野田衆は、決して書いてはならない宗主感状「野田御書」を二通も書かせたしたたか者であった。その後、野田衆に証如からもう一幅の「方便法身尊形」の阿弥陀如来像が下賜された。春日神社に伝わる(次頁)。在家門徒に下賜されたもので年号日付けもない。花押の形は天文五年く一〇年であるが、天文五く七年まで破門されていたので、これは、赦免直後の天文八く一〇年発給のものと思われる。やはり野田衆はなかなかの曲者であった。



(玉川) 春日神社所蔵
裏書 方便法身尊形
大谷本願寺釈証如

「中島の乱」を生き延びた野田衆

一揆に参加した人々に対する戦後処理は過酷であった。一揆の張本人は追放・殺害・諸職は召し上げ・張本人在所は荒地化・家屋は破却・焼き払い・田畑は刈り取り・家財は没収・このように根こそぎ的な処置をこうむった(奈良一揆の場合、『一向一揆論』。「中嶋中悉く焼候」(『私心記』、一揆方の城悉く落ちるなり。『細川両家記』などの記述はこれを裏付けている。しかし、『天文日記』を読む限り、中嶋衆がそのような大きな被害を被った形跡は感じられない。中嶋衆筆頭の野田衆も健在であることも文面から明らかである。わずか二年半の後、木澤長政に仲介の労を取らせるには、相当な経済力が必要であったであろう。それだけの余力を中嶋衆は温存していたのである。この乱の張本人は、細川晴国・下間頼秀・頼盛兄弟と目されたからであろう。攻める武家側には、かつて中嶋衆を率いて戦った三好連盛(と長慶?)も加わっていたことも影響したかもしれない。また「野田御書」の存在も大きかったであろう。しかし詳細はわからない。

註12 順興寺実従(蓮如上人の二三番目の子。末子)の日記。天文元年八月、山科本願寺落城前から始まっている。天文初期の数少ない一次史料である。なお証如の日記『天文日記』は天文五年一月から始まっている。

註13 この時、野田の門徒は大坂御坊を守っていたと思われる。ここで陣頭指揮をされていて窮地に落ちいった証如を助け出し野田村に一時匿つたと推定される(『圓満寺縁起』)。

註14 一揆軍が棕橋城を攻略した(『豊中市史』とあるが、実際は“三好伊賀・久助に率いられた一揆軍”であった。三好伊賀は手勢が少なかったので晴元と戦うために証如に援軍を依頼し、証如はこれを支援したことは、酒樽を贈っていること、実従が見物に行っていることなどから明白である。この中に野田福島衆が加わっていたことは確かであるが、具体的に「野田」が「天文日記」に現れるのは天文五年七月二一日の条まででない。『天文日記』は天文五年正月から始まっている。この頃の記事はない)

註15 『私心記』の六月二五日の日付けと一致しない。『私心記』は一次史料でこちらをとった。

註16 「潮江庄の合戦」をさすと思われるが、「尼崎」ではなく「難太」となっている。

註17 「尼崎市史」では、突然「農民軍」が現れて晴元勢が大勢打ち取られた、とされている。

註18 「細川両家記」生嶋宗竹作。尼崎の下級武士。永正元年(一五四)から元亀元年(一五七〇)までを描いた軍記物。信憑性が高いと評価され、戦国期畿内政治史の重要な史料として利用されている。下級武士だったので、合戦の背景やトップの意思決定過程はない。

三 一連の合戦が後世に与えた影響

(1) 繁栄していた安土桃山時代の野田村

戦国時代が終わったころの野田村は打ち続く合戦で疲弊していたの思うであろう。しかし江戸時代初期の地誌『芦分舟』や同じころに書かれた下河辺長流の「詞書」に見る限りそうではなかった。

【『芦分舟』】（延宝三年・一六七四）福島といふ所より 西の方

にあたりて 名にしおふたる野田といふ里あり されば 吉野の桜に野田の藤 高尾の紅葉などと 熊野の海女 犬うつわらばまでも 唱歌しける 名所 これ見ても見ても見あかぬなるべし。其のかみ慶長年間のころまでは 見物の貴賤 群集してこのフジをめぬものはなかりしとや されとも時うつりことさり 楽しき月 華やかなりし時の 楼閣なども 人すまぬ野良となり 〈以下略〉

【下河辺長流の詞書】咲く花の下にかくるる人 多おみと詠める歌

は いにしえ藤氏の栄華のさかりによせたるなるべし これは近き世に豊臣の大閤 麻の衣の単衣よりおこりて ついに我が大和をさえ 覆いあまれる袖の勢い遥かなる唐土まで脅かし給うる時に 名は高浜の松の響きと 四方に聞こえし藤なりけむ。今はその古根のひこばえなおいおり庭に残りて春を忘れぬ形見なれば ゆかりの色を尋ね来りて みる人の絶えぬも哀れなり

これで見ると戦国時代が終わった安土桃山時代（秀吉の時代）は、意外なことに野田村は繁栄していた。打ち続く合戦でも、大きな被害を受けなかったと思われる。

「慶長の頃までは」とあるように、「大坂の陣」までは、野田村と藤氏は全盛期だったのである。しかし「大坂の陣」の前哨戦「野田福島合戦（二回目）」で、東軍の池田忠継の軍勢に焼き討ちにされ村は全焼した（『西成郡史』）。野田村が焼け野原となったのは、戦国時代ではなく、その後の「大坂の陣」であった。

(2) 門徒の鑑とされた二十一人の野田衆

本願寺の法統を守り身命を賭して戦った野田衆は、江戸時代「古野田石山の亀鑑きかんにもおさおさ替わりなく末世まつせに至って頗る奇特は増長せり」と本願寺教団内で門徒の鑑とされた註21。

(3) 現代も直参門徒として厚遇されている円満寺門徒

野田衆の末裔である圓満寺は今も西本願寺から厚く処遇され、戦国時代の直参門徒としての扱いの面影をとどめている。そのことを『圓満寺文書』註22から引用する。

毎年一月の西本願寺最大の行事である御正忌報恩講しやうぎ（一月九日（一六日））において、圓満寺御頭講は一月一三日には西本願寺からの懇請によって必ず上山し、御齋の頭人（御頭人）として筆頭席に着座し、御頭人として初夜勤行の総責を負っているのである。

（後略）

代々の宗主が変わるごとに、直参門徒は変わることも多い中で、証如、頭如の時代から現在に至るまで直参門徒の地位が続いているのは驚くべきことである。「野田御書」及び「方便法身尊形の阿弥陀如像」が門徒の結集軸であったことは無論であるが、代々の住職・門徒の御苦勞に多大の敬意を表す次第である。

註 21 『同朋大学仏教研究所紀要』第二五号、青木馨著 二〇〇五

註 22 『野田藤と圓満寺文書』内田九州男編 二〇〇三

【まとめ】

1 「畿内天文の一向一揆」が勃発すると、野田福島の前徒は本願寺側につき、大坂御坊を守っていたと考えられる。天文元年八月九日、戦線は大坂御坊の膝元に迫り、証如は危地に陥った。野田・福島の前徒はそれを助け、その合戦で二一人が討死した。

2 天文三年六月五日、晴元の武将・三好伊賀守連盛が本願寺に寝返ると、野田の前徒はその援軍に入り、六月二五日、棕橋城を占拠した。その功績によって直参門徒に取り立てられ、天文三年七月二三日に初めて親鸞聖人の齋の御頭役になった。

3 同年一〇月二〇日の尼崎潮江庄の合戦に至るいくつかの合戦で勝利し、本願寺は劣勢を挽回した。その功績で野田惣道場に「天文三年一二月二五日」付の絵像本尊が下賜された。円満寺に今も残る。

4 天文五年三月二六日、細川晴国を大将格に「中嶋の乱」が勃発すると、野田衆を始め中嶋八力村はこれに参戦し、同年七月二八日証

如から破門された。翌二九日、木澤長政・三好政長・三好連盛等の軍勢によって乱は鎮圧されたが、多数の前徒が殺され中嶋中が焼けた。

5 天文七年一二月二六日、木澤長政の仲介で、中嶋八力村は赦免され元の直参門徒に戻った。

6 討死した二一人の前徒は、江戸時代「門徒の鑑」として、本願寺教団内で広く知られていた。現在もその末裔である円満寺前徒は、本願寺で直参門徒の面影を留め厚く処遇されている。

【残された謎の数々】

- 1 証如はなぜこの時に限り宗主感状を書いたのか？
- 2 なぜ書いた時期が異なると思える感状が2通もあるか？
- 3 なぜ多数の写しが作られたのか？
- 4 三好伊賀はなぜ本願寺に寝返ったのか？
- 5 その時長慶はどうしていたのか？
- 6 いかにして野田衆は「中嶋の乱」を生き延びたのか？
- 7 野田福島と連合していた中嶋6力村は一体どこか？

【あとがき】

小論は『福島区史』をはじめとする地域史には書かれていない戦国時代中頃の野田・福島の実像に迫ったものである。新説であるので、結論に至る根拠となる一次史料や論考を加えた研究者向きの「論文」になったが、難解な部分もある。一方、『なにわ福島ものがたり』（二〇一二）所収の拙稿「三十一人討死」の合戦と一向一揆は、本論の結

論を出発点に一般の読者を対象に書き下ろした「物語」で、平易で面白い反面、研究者には物足りないかもしれない。歴史の研究は奥が深く謎が多いことがお分かりいただけるでしょう。謎解きも楽しみです。今後の研究に期待します。最後になりますが、当時集めていた文献の一部は散逸して見つかりませんでした（出典不詳の史料）。どなたかわかったら教えてください。また三好伊賀守を長慶とした事実誤認がありました。改めてお詫び申し上げます。

【謝辞】

大阪市史編纂所・尾崎安啓所長には、連盛・長慶連署の起請文関連史料の調査をお願いしました。また本稿をお読みいただいた上で貴重なお助言を賜りました。厚く御礼申し上げます。

前述の「二十一人討死」の合戦と一向一揆についてM会員から多々疑問点が寄せられました。それら一つ一つ原典にさかのぼり再検討し、解説や当時の思考過程などをたどると本論考に至りました。これも同会員の熱意の賜物であります。



田辺聖子と戦争体験について

多田一夫

田辺聖子（以下、聖子さん）は、二〇一九年六月六日に亡くなっています。生前に版を重ねた『私の大阪百景』（一九六五年）は、聖子さんの少女時代を描いたのもので、『田辺写真館が見た「昭和」』（二〇〇五年）は福島区での多感な子ども時代の記録です。戦時下での体験は、『欲しがりません勝つまでは』（一九七七年）や『おかあさん疲れたよ』（一九九二年）などの小説に反映されています。小説ではありませんが、『福島区史』（一九九三年）に「戦火に消えたわが町」という一文を寄稿しています。

「大阪の福島は私のふるさとである。」

私は昭和三年の生まれで、昭和二十年の空襲に罹災するまで、ずっと往んでいたから、まる十七年を暮らしたことになる。福島西通の交差点（昔は五丁目といったが）から南の堂島大橋に至る、ちようどもん中ほど、電車みちに面した田辺写真館が、私の生家であった。

（中略）

小学校は福島尋常高等小学校、私たちの遊び場は、電車みちの向いも馴の紡績会社跡の広っぱだった。「中の天神サン」も「上の天神サン」染みの遊び場だった。上の天神サンへの道には夜店がでた。夏祭は神輿もあった。

(中略)

昭和二十年三月と六月の空襲で、なつかしい「わが町」は消えた。(後略) 『福島区史』一三六頁より抜粋

戦争中とはいえ、少女時代の聖子さんの周辺は、「安定して、おだやかな、恵まれた」ものであったようです。祖父、祖母、両親、兄弟などに囲まれながら、中原淳一の表紙絵が人気の『少女の友』に熱中して、好きな本を父親のツケで自由を買えたのです。

一九四〇年、聖子さん一二歳の時に、淀之水女学校(現・昇陽高等学校)に入学し、二年後、樟蔭女子専門学校(現・樟蔭女子大学)国文科に入學します。いづれも私立の学校ですので、当時の暮らしがうかがえます。しかし、女学生の頃から戦争の影は大きくなってきます。空襲で大きな家だった写真館が焼かれ、父親が失意のうちに亡くなり、母らとともに、福島から転居を余儀なくされました。

聖子さんの死後新たに発見された日記、『田辺聖子「十八歳の日の記録」(二〇二一年「文藝春秋」七月号)』には、一九四五年四月一日から一九四六年一月三十一日までの間に聖子さんが体験した空襲や敗戦、父の死などとともに、将来の夢が記されています。日記の内容を要約した見出しから、戦争体験の具体的な様子と、本人の受け止め、内心の様子がにじみ出ているように思えます。

一九四五年

四月九日以降 「日軍艦マーチと樟蔭寮の楽しい日々」

四月一四日 「東京爆撃への怒りとルーズベルト大統領の死」

四月一八日 「特攻隊の人々に劣らず私達も死ぬ自信はある」

四月二七日 「ドイツの降伏! 何という事だろう」

五月五日 「女工さん、挺身隊との「最後の饗宴」

五月二〇日 「校長先生から「男女の恋愛問題」のご注意」

五月三十一日 「初めて見た肉塊から目が離せなくなる」

六月二日 「大阪大阪空襲の日、美しい我が家は焼けた」

六月四日 「私はひるまない。私は泣かない。私は屈しない」

七月二四日 「空襲に疲れ、創作意欲が湧いて来ない」

八月一五日 「八月十五日——嗚呼、美しき伝統と国体は何処に」

八月三〇日 「あらゆるものを吸収したくて体がフクレ上がる」

九月一〇日 「父、病床に伏す」

一〇月七日 「天皇制は修正——私は成り行きを見ている」

一九四六年

二月一九日 「私は私の好む文学の道へすすみたい」

三月二二日 「新田生活、常用漢字、そして初の女性代議士」

四月二五日 「終戦後初の天長節と最終学年の始まり」

五月一九日 「繁華な京都で映画を見てコーヒー飲んで」

七月一八日 「阪急の屋上から飛下りて死にたくなった」

九月二〇日 「人間はいかに生きべきか」

十二月一三日 「さらば十九の幸多かりし年よ」

聖子さんは、一九四五年一月から、勤労働員で伊丹近くの航空機制作所の工場で働くようになっていました。六月の大阪大空襲では自宅が全壊して、その六か月後の一二月に父・寛一を病気で亡くしています。四月「日軍艦マーチと樟蔭寮の楽しい日々」から「ドイツの降伏!

何という事だろう」までは、「軍国少女」としての聖子さんの面目躍如の様子です。五月三十一日の「初めて見た肉塊から目が離せなくなる」から「私はひるまない。私は泣かない。私は屈しない」、「空襲に疲れ、創作意欲が湧いて来ない」とつづく二か月間は、空襲・戦争の苛烈さや残酷さに押しつぶされそうになっている聖子さんです。一九四六年七月の「阪急の屋上から飛下りて死にたくなった」から「人間はいかに生くべきか」・一二月の「さらば十九の幸多かりし年よ」は、敗戦で人々が争って食料を求める中、聖子さんもその渦の中に巻き込まれ生活に苦しんでいます。しかし、父を失った家族のために、自分が家族をになつていこうと決意する、学生から社会人への聖子さんの旅立ち宣言がつづいています。

日記に書かれているような、空襲で多くの人々が亡くなり、廃墟となった街を、今の大阪からは想像できません。福島区にも当時の面影はなく、聖子さんが住んでいたという痕跡も、残念ながらありません。

今年（二〇二五年）は戦後八〇年ですが、二〇二四年一〇月の人口調査によると、八〇歳以上の戦前生まれの人は、一二九万三千人で、総人口一億二三八〇万二千人の一割程となっています。また、約二二万四千人（推計）が亡くなったと言われる広島と長崎の原爆に苦しむ、原爆被災者（被爆者健康手帳所持者）の方々は、三七万人以上から現在一〇万人以下となり、平均年齢も八六歳以上となっています。あと一〇年もすると、戦争の語り部がいなくなり、「戦争を知らない子供たち」（終戦から二五年後の一九七〇年に作られた歌のタイトル。ジローズ（杉田二郎&森下次郎）が歌い、作詞は北山修、作曲は杉田二

郎）でした。大阪万博のステージで歌われましたが、当時のベトナム戦争への反戦歌と受け取られ、批判を受けた）だけの世の中になりました。

語り部・聖子さんの日記をはじめ、小説やエッセイなどから、先の戦争を追体験（「なぞる」）してみてもどうでしょうか。

（注）『田辺聖子「十八歳の日の記録」』（二〇二一年「文藝春秋」七月号）は、単行本化されています（『田辺聖子十八歳の日の日記』二〇二二年）。雑誌では省かれていた、一九四七年一月から三月までの文章も掲載されています。

【参考】中周子「田辺文学を生んだ『福島』」（『会報17号』（所収）



一福島区の野田・玉川・吉野・新家・大開地区一』2025年12月 全20p
福島区歴史研究会編集・発行

「区の花・のだふじ」は

コンテンツツーツリズム

藤 三郎

のだふじの復興活動は昭和四六年（一九七二）、今から五十四年前に玉川小学校で「大阪福島ライオンズクラブ」が「野田藤展」を開催したことに始まります。当時の新聞を見ると「福島区平松町玉川小学校」となっていますから、時代の変化を感じさせられます。野田の藤は、過去に盛衰を繰り返しています。

一回目に栄えたのは安土桃山時代（秀吉の時代）で今から四百年前のことです。大阪最初の地誌『芹分舟』（延宝三年 一六七四）には、野田の藤が吉野の桜や高尾の紅葉と並び称され、身分の貴賤を問わず多くの人々が訪れる名所であったことが記されています。当時は楼閣も建ち並び、見飽きることもない景勝地であったそうです。その後、大坂の役の前哨戦「野田福島合戦（二回目）」で東軍によって焼け打ちされ、この付近は焼け野原となりました。

二回目の最盛期は、江戸時代中頃の宝暦年間の頃です。春日神社（当時は春日明神）は宝暦九年（一七五九）「藤之宮」と呼ばれるようになります。そのころは大坂城代・井上河内守正賢、戸田因幡守忠寛、代官・内藤十右衛門、青木楠五郎などが藤見物に訪れていました。

明治時代以降このフジは衰え、わずかに残っていたフジも昭和二〇年六月一日の大阪大空襲および昭和二五年九月のジェーン台風で塩水を冠水し、ほぼ全滅した。

その後「大阪福島ライオンズクラブ」が復興活動を開始し、「のだふじの会」がフジを見事に開花させ、それがSNSで拡散し有名になりました。現在は三回目の最盛期と言えます。

今年も春日神社周辺の狭い路地は、フジの開花中は連日見物客であふれかえりました。そして新聞やテレビでも次のように取り上げられました。

（１）毎日新聞 二〇二五年四月二二日 「我が町にも歴史あり」

知られざる大阪 ノダフジ（大阪市福島区） “名所咲かせた

立役者”（松井宏員記者）【写真左上】

「立役者」として筆者が紹介されました。二〇年間にわたる

「のだふじの会」でのボランティア活動の結果です。

（２）読売新聞二〇二五年四月二〇日 ノダフジ最高の春

（飯田拓記者）【写真左下】



(3) ベイコム 二〇二五年一〇月四日 「福島区民まつり」で取材。

驚いたことに一〇月に入ってトラピックス（阪急交通社）が三回に分けて観光バスで春日神社に来るといいます。筆者は「フジも咲いていない」「小さな社があるだけで何もない」と説明しましたが実施されました。

このことは、区の花・のだふじが単なる花の観光ではなく、「コンテンツツーリズム」であることを示しています。人々は咲いているフジを見ているだけではなく、その背景にある長い歴史や牧野富太郎による「ノダフジ」命名の由来、新五千円札のデザインに使われたことなどを、花と重ね合わせながら楽しんでいるのです。

「区の花・のだふじ」は、物語―ナラティブを楽しむ大阪市の観光資源になったのです。



展示「ノダフジの今昔」から
会場・福島区役所 4～10月

二〇二五万博あれこれ

村尾清一郎

一 万博前後の大型車の通行

ユニバーサルスタジアム西交差点（此花区）から野田阪神前交差点へ行く北港通は、車線も多い幹線道路である。野田阪神からは真っ直ぐ梅田へ行ける道路だ。野田阪神から北へ二号線を行って淀川大橋を渡ると神戸方面に行く。

万博工事が始まり、自宅（此花区）前に多くの大型車が通り、余りにも、空気が悪くなっていた。

千鳥橋停留所でバスを待っていると、特に此の道路はひどかった。西九条駅行き、野田阪神（大阪駅行き）は、道路に接してグッとバスがバス停に、左側より斜めに入って来て迫ってくるので、反対側より倍の空気の悪さを感じる。他の大型車も同じである。

時期も忘れてしまったが、此花区の区長に会った時、「この道路は大型車が通らない様にして欲しい」と言った事がある。それ程悪かったのだ。しかし、結果は変わらず同じだった。

二 万博の資料とそのお話

自宅の近くに銭湯が有り、その若旦那は助手の女の人とで切り盛りしている。

万博が終了に近いある日、万博の話が盛り上がり、「大阪・関西万博の公式ガイドブック」と「予約、自由入場等が記入された万博地図」

を見せると、その若旦那が「この二種類のものを始めに見たかった」と言ったが、時すでに遅しであった。

この若旦那は万博に三回しか行っていないが「この本と地図を早く見れば、万博に対する気持ちと行動の範囲が広がった」と語った。確かにそうかも知れないと思った。

この様に、万博の話が早い遅いに関わらず語られ広がっていったのでしよう。早く気が付いた人は多めに行ったことであろう

三 ケニア館

ケニア館は、コモンズA館の左側の一番奥にあり、大阪・関西万博公式ガイドブックの受け売りですが参考にしました。

「赤道が国土を二分するアフリカ大陸、東海岸にあり、東アフリカ最大のモンパサ港があり、パビリオンでは多民族国家を代表するマサイ族のマネキンが来場者を迎えます。」

ケニア館の前には、ケニアのコーヒー豆の入った八×二〇cmの丁度よいコーヒー豆を入れるケースが五種類有り、後は細かい

植物はバニラと思うが同様のケースが何個か並んでいた。コーヒー豆の匂いを嗅いだ後、担当の女性から「チョット待ってください。」

と言われ、小さな紙コップでコーヒーをこちそうになった。普通の人には5cmも顔を近づけて香りを嗅ぐような事はしないかも知れない。このコーヒーは美味しかった。チョット恥ずかしかったかな。

その時パンフレットも一緒にもらいました。

次に二回目に行くと、腕バンドを男性が、私の大きな手にかかわら

ず入れてくれた。

その次に訪ねて、ケニアのバッジをお願いしてもらいました。

前回の事が心に残り、小豆を焚いて外側を砂糖で固めた鶴屋八幡の山清水と言う御菓子を渡した。そうすると男性三人が彼等のスマホで私を入れて写真を撮った。

珍しいことだった。ケニア館は非常に直接的な対応をしてくれた

四 タイ館について

タイパビリオンは、入り口には木製の三匹の親子象が置いてあり、その左側は舞台があります。

このパビリオンは左側半分の屋根瓦の建物になっております。右側は鏡張りみたく、両屋根に見えます。

ある程度の人が待っている所に並んで中に入るとタイの挨拶の映像等があり、健康や医療に関する展示があります。

頭蓋骨の手術の展示は非常に感心して、三〇分くらい、じっくり見せていただきました。そしてパンフレットをもらいました。本当に医療技術に力を入れている事が分かりました。料理はあまり興味が無いので飛ばしました。

此処からは、外側の内容を書きます。

外に出るとテーブル席が有りますが料金が高そうなので食べません。奥の左側から奥に入りゴーグルを付けると、中央には金色の仏像が出現し、両側には細い出入り口が有ります。元の出入り口になっている所は見えず、大きな部屋になっており、びっくりしました。此れ

は凄いい었습니다。あまり、ゴーグルを使わないからかも知れませんが。

次に、タイに有るムエタイ（タイ式ボクシング）があり、ハガキ大の写真を二枚もらいました。写真の中の、これが私ですと言ってくれました。それと、小さなグローブ形をしたキーホルダーももらいました。それからムエタイの実技を見学しました。

右側の手前では、簡単な匂い袋の作り方を教えてもらいました。作り方は、六個の小さな塊を作り、小さなビンよりスポイトで六個の綿に匂いの元を振りかけた後、布で六個の小さな塊をまとめた後、口をタコ糸で縛り出来上がる。此の匂いは、嗅ぐと知らない匂いでした。上記三種類のことがあって、スタンプが十種類程有り、押させてもらった。

帰り道には、休憩する所があった。花や、多くの置き物が有り楽しく見学させてもらった。

『会報 第十八号』の訂正とおわび

書名に誤りがありました。

目次、21ページ、30ページです。

正 誤

『都会にフジ・・・』『都会のフジ・・・』

二〇二五年大阪・関西万博見聞録

藤 三郎

二〇二五年大阪・関西万博を九回訪れました。集めたスタンプは一〇四か国、かなりの国を訪れたことになります。各国は競って、それぞれの文化や価値観を生かしながら、未来の地球と人間のあり方を探る姿勢を打ち出していました。

中でも、イタリアはフォルネーゼのアトラスなど有名な芸術作品展示のほかに、入り口近くで地方の民芸品製作の実演をするなど「芸術で未来を拓く」、フランスはルイヴィトンの巨大な映像で始まり、ノ



フォルネーゼのアトラス

ートルダム寺院と沖縄・那覇の首里城、モンサンミッシェルと宮島のコラボなど「文化で未来を拓く」自信に満ちていました。ベルギーは「ワクチンの開発」で、ドイツは得意の化学技術を駆使して「エネルギーの貯蔵技術」で、“未来に命をつ

なぐ”というコンセプトが明確で国柄がよく出ていました。

超大国アメリカ館は巨大な大画面による音と映像で圧倒されました。アメリカの大自然と都市文明、宇宙技術を誇っていましたが、全部音響と画像のみで、「月の石」以外は実物の展示は全くありません

でした。まるで巨大な張子の虎でしたが、自信と誇りに満ちていました。

一方、政府が巨費を投じて建設した「日本館」は、先ず生分解性プラスチックが環境にやさしいことをアピールしていましたが、生分解性プラスチックは全プラスチック消費量の0.02%に過ぎず、違和感を感じました。次に再生水、酵母など発酵技術、藻類の技術などが展示されていました。七〇年の万博では、日本は自信と希望に溢れていましたが、今回の万博ではそれが感じられませんでした。

そのような中であって印象に残ったのは、「パナソニックグループ」の「ノモの国」。ここではクリスタルを手にとって館内を一巡すると、「AIの目」がその人を観察・分析して「あなたの蝶」を作り、クリスタルを持つ人の性格を言い当てるのです。私は何気なく一巡しましたが、「大変観察力が鋭く注意深い性格」とAIは言いました。人工知能は、七〇年万博当時予想されていた以上に進歩し、明らかに人間を上回っています。

二〇二五年万博の特徴は、光や音、映像が一体となって、まるで生命の鼓動そのものに包まれるような感覚だと思えます。福岡伸一氏の「いのち動的平衡館」、落合陽一氏がプロデュースした「ヌルヌルmuu」は、映像技術と芸術との融合でもって、いのちの鼓動を伝える見事な演出でした。

パナ館では、山中伸弥教授のiPS細胞で作られた心臓の細胞片が鼓動していました。「ここまで研究が進んだか！」と感嘆する一方「まだこの段階か！」と複雑な気持ちでした。

私たちが日ごろあまり関心を持たないアゼルバイジャンやトリクメスタンといった中央アジアの国も、近代化をアピールしていました。カタール、バハレーン、オマーンといった産油国は、オイルマネーを背景に急速な近代化を誇り、自信と希望に満ちていました。

アフリカ諸国や南方の島々の国の展示では、環境や文化を守りながら、デジタル技術を活用して、教育や医療、エネルギー問題などに取り組む姿勢が感じられました。科学技術の進歩を誇示するのではなく、



菅原住職の講演

「技術は人を幸せにするためのもの」という理念が伝わってきて、とても温かい印象を受けました。

また、堺の顕本寺・菅原住職などが企画・プロデュースした「三好長慶

が愛した連歌」をテーマにしたイベントも心に残りました。戦国時代の武将でありながら文化人でもあった長慶が愛した連歌を通して、人と人の心のつながりを現代に伝えようとする企画でした。また連歌の起源は遠く古事記や万葉集の時代にさかのぼること、弥生時代に様々な言語の異なる民族が日本に移り住む過程で、連歌の前身である相問歌が日本語の成立に貢献した、との講演には驚きました。

夜空に広がるドローンショーは圧巻の見ものでした。数百個のドローンがAI（人工知能）でコントロールされ、瞬時にフォーメーション

ンを変えるのです。これが武器として使われたら全部迎撃するのは不可能です。この技術が現にウクライナで使われ、都市と人々を破壊しまくっているのです。AI技術はまさに両刃の刃です。

今回の万博は、予約システムが複雑で、若者のように自在にスマホを使いこなす必要がありました。それでも二五〇〇万人以上が、この予約システムを駆使して見に来たことで、人々、特に私のような高齢者のスマホ活用技術向上に貢献したことは間違いありません。このように今回の万博は、遅れている日本のデジタル化を推進しました。場内で現金は使えず、すべてキャッシュレス決済でした。これも遅れている日本のキャッシュレス化を推進したことでしょう。

七〇年の大阪万博は「人類の進歩と調和」をテーマに、技術革新と経済成長の象徴として世界を驚かせました。リニアモーターカーやカラーテレビなど、まさに“未来の夢”が目の前に現れたような感動を与えてくれました。そこには、これからの日本がどこまで発展できるのかという希望と誇りが満ちていました。それに比べて、今回の二〇二五年万博はまったく異なる性格を持っていると感じます。技術の進歩そのものよりも、「人間がどう生きるか」「地球とどう共存するか」という問いが中心にありました。

これからの人類は限られた資源・エネルギーを使って、環境に配慮しながら生きていかなければなりません。AIがまだまだ進歩して人間が考える必要は減っていくでしょう。これは沢山の人々から仕事を奪うということです。人々はだんだん現実の世界から、Virtual Reality（仮想現実）の世界へ逃避して行くのでしょうか。時代が変

わり、私たちが求める“進歩”の意味も変わりました。物の豊かさから、心と命の豊かさへ——その転換点に、私たちは今立っているのです。



筆者夫妻



二〇二五年を振返って

―万博、セミナー講師、宮座神事など―

末廣 訂

戦後八〇年、そして令和も早七年が過ぎた。お蔭様で二〇二五年も忙しい年であった。夏は格別に暑く、しかも一〇月に入っても暑い日が続いた。

項目別に昨年体験した出来事、行事、催しを振り返ってみたい。

一 大阪・関西万博が夢洲で五周年振りに開催

前回一九七〇年の大阪万博はアメリカ駐在中で、くしくも結婚式で五月に帰国して、式後ゆつくりと万博見学するつもりでいたが、結婚式三日前に盲腸の手術をして、手術の糸を付けたままの結婚式となった。帰米を一週間延ばし、出発の前日に家内と二人で万博見学、といっても主に松下館等二〜三時間しか見学できなかった。

そのような経験から今回のEXPO2025は当初からワクワクする思いであった。はじめはチケットの買い方も分からず、幸い、歴史研の村尾さんからお誘いがあり大阪駅構内の旅行会社で通期券を買い、エキスポ案内広場で、早速スマホに顔写真やチケットIDやパスワード等を入力してもらった。しかし、スマホは毎回入場する際の手続き操作に大変苦労した。

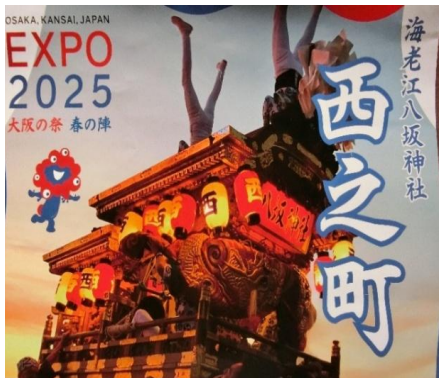
先ず、パビリオンは評判の良いところは何度挑戦しても事前予約が取れなく、ほとんどは自由に入場できるパビリオンやイベント会場を見学した。初回は全体の会場が見える大屋根リンクをゆっくりと一周

し、会場全体を見て回った。

二回目はお祭り広場で地元海老江八坂神社の西之町のダンジリが福島区を代表して、大阪ダンジリ祭りに出場するので家内と見学した。そのあと、コモンズB館でアフリカのコートジボアール共和国が出展していたので、三年前、パナソニック時代に当社の工場があり、出張した経験話をする。と館長が「初めて我が国を訪問した人と出会った」と喜んでくれ、一緒に記念写真を撮った。以後、在職中に訪問した国、約四〇か国のパビリオンを訪問することに努めた。

もう一つは我々の歴史研究会も参加した舞台として「三好長慶が愛した連歌」と題して大東市長や顕本寺住職らによるトークショーや連歌講座と実践があり大変見応えがあった。

その後は予約の要らないホールやWASSE等イベント中心に各館を見学した。



当初は最低でも二〇回ぐらいの入場を考えていたが、入場予約のスマホ操作、一番嫌いな列を並んで待つ辛さ、加えて夏から秋まで続いた猛暑で、結果一三回の見学で終わったが、毎回一万歩以上歩き、良い体験をした万博であった。

二 皆さまの前で話をする機会が多かった昨年であった。

一つ目は、毎年地元の海老江東小学校六年生を対象に、「戦争体験を語る」会をしている。今回で一九年目であり、私は昭和二〇年六月二六日、四歳の時に自宅の前に一トン爆弾が落ち、箒で掃いたように付近五〇メートルの家が吹っ飛び、防空壕の中で大きく飛び上がったという体験と、同じく昭和二〇年三月一三日の卒業式を迎えるため広島での学童疎開から大阪に戻ってきたが三月一三〜一四日の焼夷弾により学校の一部や、多くの生徒の家が被害にあい、卒業式ができなかった先輩達の話。私が小学校の同窓会長をしていた平成二〇年（二〇〇八）に七五歳になっていた先輩達が実に六三年振りに、子供たちと合同で卒業式を行った。先輩らの「涙・涙」の卒業式が大きく報道された話等々を毎年六年生に語っている。

二つ目は、歴史研究会で毎年外部講師によるセミナーを開いているが、六月の二回目のセミナー講師が見つからず、私に声がかかり、区民センター会議室で「海老江の今昔」について話をした。本件は会員の藤田由紀子さんの詳しい報告がある。

三つ目は海老江東女性会の方から「福島区と海老江の歴史」のテーマで依頼があり、コミュニティセンターで講演した。また地元では「凸

版の工場跡地に大阪市バスの営業所が中津から移転する」という話があり、移転後の交通安全や振動等の対策に地元としてどのように対応するのか、子供たちの通学道の交通安全対策等も話題にした。

四つ目は、出身のパナソニック・大阪市内支部OB会で、毎年新入会員の歓迎と創業の地・大開を探訪する会が一月にあり、二〇年振りに創業の地を案内する機会があった。

私は退職した年に、当時大開の地元の方から松下幸之助の偉業を何とか残したいと要望を受け、これに専念した体験があり、当時は時々ガイドをしたことがあった。創業の地に碑を着工するにあたり、先ず事業委員会の設立、全体の構想造りから大阪市公園局との設置許可と交渉、石碑の構図、寄付金募集から完成後の式典まで、三年半で約九千三百人の方から約七千万円の寄付をいただき、大阪市長をはじめ、松下電器の会長、社長、松下家等より二五〇名の来賓を迎え、無事終了した体験話を久々に後輩のOBにした。



大開公園の「創業の地」碑



大開小学校での話

五つ目は、これも松下幸之助創業者にまつわる話であるが、記念碑が出来て二〇年がたち、地元の大開小学校の高学年対象に「大開の歴史と松下孝之助さんを学ぶ会」として初年はクイズや動画で、昨年は「松下幸之助さんで町づくり」という話をした。今回も高学年に呼びかけたが一三名しか応募がなく、創業者の知名度が落ちており、今後の事業継続の難しさを感じている。

六つ目は、秋の歴史研究会三回目セミナーで大阪歴史博物館の大澤館長を迎えて「梅田街道」というタイトルで話があった。その後、会では大澤館長と一緒に「梅田街道を歩く」ということになり、一月三〇日に一五名程が「JR福島駅から尼崎の大作」目指して歩き、途中海老江を通過するので、海老江の歴史や街道筋を案内した。海老江は明治の末まで水郷の村として、村中「井路川」が流れ、のどかな農業中心の村であったが、工場や大きな屋敷跡にたとえば「羽間文庫」跡に高層マンションが建ち、淀川岸壁には万博用の高速道路が走り、昔の風景が変わりつつある。それでも「長屋門」や「蔵」のある旧家、八坂神社や南桂寺内では昔の親柱や街道の石碑が残っており、地元歴史の一端を案内した。

三 ドイツとつなぐZOOMで懐かしい部下とOB会

もう四〇年も前にドイツでモーターの会社を設立した時に採用したドイツ人の営業担当部長と、私の秘書の女性と、日本にいる昔の同僚間でZOOMによる同窓会があった。

実はそれまでは当時西ドイツで一緒に働いた同僚とは、大阪で同窓

会をしていたが、三年ほど前から米子に住む、元ドイツで私の後任の社長をしたS氏からお互い自宅でOB会をやろうとZOOMの提案があった。今回は元現地と一緒に仕事したドイツの二人が加わり、ZOOMで再会、英語で話し合った。お互い昔の面影を残して、懐かしさと時の流れを感じ、会社設立から赤字続きで苦勞したことを思い出した同窓会であった。

四、高市早苗さんの関西決起大会に参加

石破政権の後任の一人として、女性で奈良県出身の高市早苗さんが将来の総裁、首相を目にして選挙運動の最中、九月に大阪のホテルオタニで決起大会があると聞き、参加した。

大きな会場は関西各地からの人で一杯、高市氏本人から力強い話があり、会場はたいへん盛り上がった大会であった。ただ本人の努力や運氣もあるが、ひよつとすると頂上まで行かれるのではないかと感じた。以後、東京の本番では最後まで残り、日本で初めての女性の総裁であり、首相まで上り詰め、現在活躍中である。また年末には米経済誌による「世界でパワフルな女性百人」で初めて女性として首相に就任した点が高く評価され三位に、また「働いて・働いてまいります」が流行語年間大賞に選ばれた。

五 娘と孫たち八人が我が家でワイワイガヤガヤの勉強会？

八月の暑いお盆休みに、三人の娘と孫たち八人がわが家に集まり、一台のテレビの前でワイワイガヤガヤの勉強会をした。このきっかけは、前述の私が体験した二つの講演会であった、

六月に区民センターと地元女性会で話した「海老江や福島区の歴史」の話の聴いた娘達から「お父さん、一度わが家や海老江の歴史を子供たちにしてほしい」とせがまれ、開いた勉強会であった。孫は高校三年から幼稚園まで、久しぶりに揃って、夕食後、過去に取った八ミリ動画、スライド、写真を利用して昔話をした。

孫たちは特に興味を持ったのは我々夫婦がアメリカ・NYやアトランタで住み、長女がアトランタで生まれたこと、そして在米中に八ミリで撮った各地の動画、生前の祖父母の姿、地元の八坂神社の祭り、ドイツ赴任中に二度、三人の娘が来て旅行したこと等々テレビの画面を通じてワイワイガヤガヤの勉強会であった。

孫たちは意外と熱心に見て、出来たらこのような会を時々開いてほしいと言ってくれた楽しい勉強会であった。



娘たちとの勉強会



宮座神事

六 年末、宮座神事で頭屋を、枕太鼓の修復委員会、東京の同窓会へ出席。

一二月に入って毎年恒例の宮座神事がある。海老江八坂神社の宮

座は元禄時代に神事用お椀を四〇揃えたという記録があり、三〇〇年余の歴史があり、今や大阪で唯一残っている宮座である。しかも大阪府の無形文化財になっており、大変気を遣う神事である。

今年は私の家が頭屋にあたっており、本来なら自宅に座衆が集まり、座衆でお供え物を料理し真夜中に松明行列でお供え物を神社に運び、本殿にて神事が行われてきたが、平成二十三年（二〇一一）から神社ですべて行うようになった。その際、出来るだけ旧来の神饌や蒸し等神事の基本を残し、翌日の直会も当日に終え全体を簡略化しながら伝統を守っている。

コロナの時は一時中断した松明行列も祭りの若中達が従来通りの儀式を守って行ってくれている。今回、御幣持ちとして、次女の中学生の孫が手伝ってくれた。ただ、伝統あるこの宮座も出ていただけの座衆が減り、存亡の危機に面している。

一方では、八坂神社の夏祭りは年々賑やかになっている。私が所属する北之町は枕太鼓であるが傷みやほころびが出てきて、大体一〇年ごとに大きな修理が必要となっている。

その太鼓の修復委員長に指名され、一二月初めに第一回目の委員会が開かれた。枕の刺繍の修理、台車軸の摩耗や太鼓皮の替え等、修復にかなりの金額と手間が必要になり、委員会を設けて検討することになった。長丁場の対応になると思う。

最後は同志社大学時代のESS同窓会が二十三日東京の銀座であり、新一万円札関係で日銀に行つて以来、一年振りに東京に行った。東京へは大学のゼミやアメリカ松下のOB会等で毎年一〜二回行

く機会があるが、クラブの同窓会出席は初めてであり、旧部員一三名が参加し、懐かしい同窓会であった。

今回は家内の叔父が埼玉で施設に入っており、見舞いがしたいと一緒に行き、一泊して翌日は湯島、本郷を見学して帰阪した。特に東大の赤門を見たかったが、修理中でシールに覆われ大変残念であった。

人生百年の時代、今年八五歳になるが、まだ自分の足で歩ける間は元気であちこちを見て回りたい。

祝 森畑通夫さん 叙勲

二〇二五年四月二十九日付春の叙勲において、本会事務局次長森畑さんが「瑞宝双光章」を受章されました。元近畿経済産業局通商部国際化調整企画官として、その功績が称えられました。

おめでとうございます。



AIが拓くこれからの郷土史研究

藤 三郎

近ごろ話題のAI（人工知能）（ChatGPT）を使い始めてみて、正直少し驚いている。なかなか賢いのである。別稿「戦国時代・天文前期の野田村考」を執筆する際にも、一部AIの力を借りてみたが、その便利さは小さくない。

郷土史の研究は、まず文献を探すことから始まる。しかし、この「最初の一步」の敷居が思いのほか高い。必要な文献を探し出すだけで、膨大な時間と根気を要するのだ。私たち市井の研究者のまわりには、大学の研究室のような専門の教官がいなければ、すぐそばに大きな図書館があるわけでもない。私自身、これまでに二冊の本を書いたが、その取っかかりは「犬も歩けば棒に当たる」式に偶然良質な底本と出会ったことから始まった。その後は孫引き・孫々引きを重ね、大阪市立中央図書館・大阪府立中之島図書館、さらには学研都市の国会図書館にも足を運び、ようやく一次史料にたどり着いた。こうして「研究書」らしいかたちになったが、そこには“運”と“根気”が確かにあった。ところが、AIに同じテーマで再調査させてみると、驚いたことに江戸時代の園芸書をひとつ見落としていたことがわかった。「もう調べ尽くした」と思い込んでいたのだが、AIはあっさりとその盲点を指摘してきたのである。

AIは、人に尋ねるようになくごく自然な言葉で問いかければよい。特

別な技術もいらない。もちろんAIもウソをつくし、間違いもする。こちらの“期待”を読み取って、都合の良い答えを返してくることすらある。だからこそ、最後の確認は人間が行わなければならない。曖昧なときは専門家に聞けばよい。AIは万能ではないが、研究者にとつての“強力な助手”にはなる。ただ、ヒットした文献の原文が正確に出てくるとは限らないし、デジタル化されていない資料はそもそも検索にも引つかからない。だから最終的には現物を確認する必要がある。中央図書館には頼りになる書司の方々がおられて、書架の番号も、書架にない場合は親切に書庫から探してくださる。こうした“人の知恵”とAIの“検索力”を組み合わせれば、研究の歩みは格段に軽くなる。

古文書の読み下し・現代語訳は一瞬で生成してくれる。注釈までつけてくるのだから、初めて古文書に触れる人の背中を押す力は大きい。文章作成も得意で、論文調にも読み物風にも自在に仕上げてくれるだろう。ただし、できあがったものをそのまま使うのはお勧めしない。AIを“指導教官”と思つてまず下書きを出してもらい、それをもとに現物を検証しながら、自分の言葉に書き直すのがよいだろう。

将棋や囲碁の世界では、AIの登場が棋士たちの実力そのものを押し上げた。人間がAIに学ぶ時代である。これからは、AIが書いた文章か人間が書いた文章か、その判別もつかなくなるだろう。

郷土史研究の根本は、身近に生まれる素朴な疑問にある。「いつ？どこで？誰が？何を？なぜ？」を、まずAIに投げかけてみればよい。そこから新しい視点や未発表の事実が返ってくれば、ついで

に“論文風”に書いてもらってもよいだろう。

かつて「文献調査」という大きな壁に阻まれていた人も、文章や論文を書くことに苦手意識のある人も、今なら研究の世界に一步を踏み出せる。AIは、郷土史研究の裾野を広げ、研究会全体の質を引き上げる力を持っている。もはやその時代は、静かに、しかし確実に始まっているのである。

後記…これは、二〇二五年二月一日の勉強会で話した内容を文書化し、それをAIに「味を付けて」もらったものです。

へトピック 藤庵の碑の銘板が・・・

二〇二五年の春ごろ、下福島公園に高速道路建設のため移設された藤庵の碑の石の銘板が、破損の恐れがあるとのことで、撤去されています。しばらくして張り紙が貼られましたが、紙はなくなったまま現在に至っています。

現在



説明板があったとき



講演会 高瀬善方氏が語る会

司会・記録 宮本隆正

開催日 二〇二五年四月二五日（木） 一四時～一五時四五分

会場 福島区民センター

司会 皆さん、こんにちは。お忙しい中、会員限定ということで講演会を開催させていただきました。本日はご多忙の中、高瀬善方様にお越し頂いて、ざつくばらんにフランクに何でもかんでも、テーマを決めずに、しゃべって頂くということで一時間少しお付き合いを頂きます。高瀬善方様は昭和五年（一九三〇）のお生まれで、今年九五歳になられます。

永年、福島区で要職を歴任されまして、家業は不動産業をされておりますが、現在は娘さんが後を継いでされております。特に私が思ったのは、ノダフジを区の花にした人というイメージがあります。この会を催すにあたり、昨年の三月に高瀬様より私の方にお電話を頂戴しました。私が会長になったためかどうかわかりませんが、福島区が出来た頃の話を一〇分くらい、お電話でしゃべって頂きました。これを私だけ聞くのもどうかと思い、昨年に開催できれば良かったのですが、今日に至った次第です。

「高瀬善方」というお名前を検索しましたら、福島区歴史研究会の昔の講演会にぶちあたり、二〇一三年の一〇月頃に高瀬様と鷺洲の古崎様と玉川の今井様の三人で郷土史講演会を行って頂きました。会報の

二号にその事業報告はありますが、中味に関しては記述がなく、内容については不明です。

それでは高瀬善方様をご紹介致します。どうぞよろしくお願い致します。

高瀬 さあ、話し出してよろしいですか。私、昭和五年生まれです。で、現在九五歳です。なかなか九五歳と言われる方は、いらっしゃらないと思うのですが、やはりどんどん足が衰えてきて、杖について歩いていると遠方へ行くのが、かなんなあという感じで過ごしています。ただ、問題は長生きしただけに、福島区、昔の西淀川区というものを、よう知つとるんですよ。昔は阪神本線の線路より北側というか、北西側というか海老江という所は全部西淀川区だったのです。西成線の国鉄ですね、桜島へ行くのを西成線という名前だったのです。その間がほとんど西淀川区になっておったのです。けれども、ただ問題は阪神の線路の所で、此花区と西淀川区の分かれになってまして、福島区はなかったのです。言わば、吉野という地名はは全部此花区だったのです。

阪神の線路が西淀川区と此花区の分かれだったのです。それで西淀川区の区役所が海老江にありました。その前に海老江西小学校、それと凸版印刷の後ろに海老江東小学校がありましたな。

この辺は全部、いわゆる（聞き取れず）があった。ですから、私がこちらの此花区に引っ越して来た時は昭和一三年でした。その時は此花区に引っ越して来たんです。現在の江成町ですけども、小学校は全然

違うんですね。我々が通った小学校は、海老江で大体住んでまして、野里へ行った。その間でも越境で通ってましたので、海老江西小学校を卒業した訳です。そういうようなことで、阪神の線路から北側・北西側は全部西淀川区、南側は全部此花区という状況になっておりました。

私は八坂神社の際で生まれたので、多分海老江中だと思う。八坂神社の付近、あそこは材木屋さんがあったのですが、その裏で生まれました。それが昭和五年一月一日。この中で私が最年長である、だからこそ海老江に関しては割りあい詳しい。昭和一三年にこちらの此花区の方に引っ越して来て、昔の江成町です。市電の前。その時には向かいに此花警察署があったのです。その警察が今の所へ移転した。現在より一つ前ですが。西側に移転したということがありました。その時にいわゆる福島区が出来かけた時です。それまでは此花区と西淀川区の分かれは阪神の線路です。それと西成線があつて、それが大阪駅から桜島まで行く電車です。これは西成線と言って、今のようにならぬ方に繋がるというのは出来てませんでしたので、国鉄というより西成線と言うてました。この線路があつて、南側に大野町・野田とかありましたが、これは全て此花区の範疇でした。

私は海老江西小学校を出まして、それから八坂神社の前ぐらゐに住んでいましたが、あの辺で生まれました。そこで生まれて、野里へ引っ越して野里から現在の江成町へ引っ越して来た。ですから、西淀川区から此花区へ引っ越して来たということです。此花警察が移転して、しばらくすると福島区になったと、確か昭和一八年。その時、内野前に

ある此花警察が現在の所より、すぐ西側に庁舎を造りまして、そちらに引っ越したということです。ですから、私は西淀川区で生まれて、此花区に移転して、それが福島区になったということです。ただ、あの時分は非常にメリヤス屋が多くて、どこの長屋でもミシンの音ばかりして、どの長屋もやかましかった。あの時分はトラックはほとんど通りませんでした。私の所の江成町は市電の停留所の真ん前でしたけど、とにかく埃ばかりでトラックはあんまりなくて馬力ばかり。糞をするでしょう。それが乾くですよ。乾いたら、小さなワラのくずみたいなのが舞い上がるんですよ。だから、その時分は店の前にそれぞれたまつて往生しましたわ。でもね、平気なもんでね、店の前に椅子出して夕涼みをしたという思い出が沢山あります。野田阪神前からちよつと江成町ですから五〇メートルも離れてないですが、そこへ座つてると丁度その頃に電車がいろいろ来て、野田阪神で停まる。何台も停まつていく。うちの前で降りる人がようけあつてね。私は子供の時分に座つてたら、ワラはすぐに乾いて舞い上がるですよ。そんな汚い感じではなかったですね。確かに糞して行きますけども、その糞はしばらくして、すぐに乾いて飛び散るという状況で、別に何ともなかったですね。そういうことが、子供の時分にあつたということを覚えております。

でまあ、あの辺の長屋の一軒で商売をしていました。まあ表通りですから、家が古くていがんでいるしね、いつ倒れてもわからんような家でした、あの付近の家は。でまあ結局はそこを立ち退きになって、今の店の方に引っ越すことができました。それからずっとあそこ

なんですよ。家は別で、吉野小学校のそばですけど。でまあ、いわゆる海老江の皆さんは方は西淀川区で、私は此花区ということですよ。

そのうちに西淀川区が福島区になった昭和一八年に、吉野小学校とか新家小学校とか大開小学校もあったんですが、これは此花区としての小学校であったのでは。私は海老江西小学校という西淀川区の所を出たのが昭和三年の時だった。その時に此花区に引越した。

私は越境というか海老江西小学校へずっと通っていました。阪神の線路を境にして、西淀川区、南側は此花区ということになってます。だから越境ということなんです。あの時分の阪神線路は下を走っていました。国道を歩いてすぐでしたので大したことはないですが、その国道を歩いて通学でした。とにかく、阪神が下を走ると、なかなか踏切の棒が上がらないので、たいがいよく遅刻しました。遅刻して教室の前に立たされて、うちの妹と一緒に泣き出したことがありました。そもそも私が吉野小学校へ行けば、その校区に住んでいるので友達も沢山出来たのに、どうしてもいじめられる方の立場であって苦労しました。ただ、うちは表通りで、電車道に沿うとりますし、商売してますから大きな顔をしてました。向かい側にいわゆる闇市みたいなのが出来まして、そこに警察があったのです。その警察が引越した後に、小さな一坪か一坪半ぐらいの店舗を引揚げ者に与えて、商売をするということをした訳です。その時は福島警察が福島という名前ではなかったと思います。

そのうちに私は何とはなしに町会長をやり出しましてね。町会をやり出してから協議会などのいろいろな行事があるようになりまして、吉

野小学校を私は出てないので誰も知合いがいらないですよ。例えば町会長をやっているもんですから、運動会をやる時に人を集めないといけない。そんなん知った者ほとんどおらん。そこで助けて頂いたのが、今は亡くなりました方々が可哀想やから、ひとつわしらがやるわとやってくれたという思い出がございます。それはほとんど吉野小学校を出た人ばかりです。ただ、あの地は賑やかな所ではなくて、新橋筋は別にして長屋ばかりでした。まあ穏やかに住まわしていただきまして。ただ風水害があり、ジェーン台風の時に床上浸水しまして、その後も一回あったので二回床上浸水しました。畳の上まで水が来ましたから、その畳をほるのに往生した経験をしております。

いわゆる此花区でありましたが、福島区になるまでは西淀川区の方々と交流が全くなくなってしまったという時代がありました。私らが友達にしておったのは、今でも私が五年ですから、同級生は誰もいないだろうと思ってます、九五歳ですから。海老江で焼け残った所がかなりあるでしょう、海老江下とか中はね。だから、あの付近の人たちは皆私の友達がおったんですけど、誰も見んようになりましてね。皆死んだんでしょうね。そんなんで長生きしたという一つの証だとも思います。うちが表通りにありますから、表に座ってますと、若い時にはそういう友達連中が前を通るということが、よくありましたので、よく話をしました。今、同級生で通る奴は誰もおらんね。九十五歳まで生きてないんですね、きっと。

〈中略〉

海老江はほとんど西淀川区ですから、私らの若い時に、友達とかと付き合うとなると、此花区の学校と西淀川区の学校とは大分違いまし

たね。ですけど、何やかんや言うても、それで皆に協力を得て、今日まで来ておる訳ですから。

いろんなことがあつて、戦争に入ってきたんですが、現実にあそこが爆撃にあわなかったというのは、B 29が飛んでくる時に砲兵工廠を狙って来るんです。そうすると、此花の方で爆弾と焼夷弾を落として、砲兵工廠にも落とすという感じで飛んできたんですが、丁度私の前に高射砲陣地が出来ましてね。下福島公園の所にも高射砲陣地が出来て、そこで撃つもんですが、全然当たらないですよ。何で当たらないかと言うたら、上に上がらんから。うちの前の高射砲陣地で、私の中学校の恩師、商業の教師が門番をしてる。「先生どうしましてん、ここで何してまんねん」、「門番やがな。おまえ、あんまり俺に声かけるな」と言われたことがある。うちの前には高射砲陣地が七門あり、看板が「機撃破」なんてのが出てました。ただ、空襲に対してどんな撃つんですが、その撃つのが七千メートルで、八千メートルまで届かない。B 29の方は、届かん距離の点を飛ぶ。だから、その筋が吉野四丁目で、今の警察のもつと裏ですけど、その辺まで来て、焼夷弾落とさない、落とされへんのです。それで助かりました。そのあたりがずっと焼け残ってます。ですから私の所は吉野三丁目ですが、四丁目あたりから、ずっと福島へ行って出入橋まで焼け残ってまっしやろ。爆弾落とせへんねんもん、その上通らんねん。それが良いことか、悪いことか知らないが、上を通らなかつた。見てると曲がって行くんですね。初めは、大橋を狙って爆弾落とすんですが、七、八千メートルから橋に当たらんねやわ。それならと、焼夷弾に変えたんやわ。焼夷弾

ならどこに落としても一緒やもんな。そやから、西の方の春日出からあっちの方は丸焼けということになりました。

〈中略〉

高射砲陣地はうちの場合、国道の淀川大橋を守るためにあつた。その陣地はどんどん撃つもんですから、B 29は真上を通らなかつたということ、焼け残つたという幸運があつたということ。ただ、一番最後に砲兵工廠が爆弾にあつた。あの時は真上を通つたようですが、うちらの方に焼夷弾を落としたのでは商売にならんから、一番上まで行って、一番大きな爆撃をしました。これが終戦の前の前の前日ぐらいだったと思います。それで、本来なら砲兵工廠という弾薬を作る工場ですけど、あの時一番よく死人が出ました。あの時は、大阪城はなんで当たらんのか知らんけども、大阪城の東側が砲兵工廠だった。この時、私は昔の中学の二年生だったと思う。中学校は昔の商業学校ですけど、行った時に一年半ぐらい。その後は、戦時のものを作らされた。私は飛行機の翼、三国の日本アルミへ行っていました。

終戦の時八月一五日には、三年生で学校へ戻って、その年に卒業したら出来たのですが、五年まで行っても良いとのこと、五年まで行ったのですが、あの時分には勉強らしい勉強は出来ませんでした。

野田阪神の郵便局本局の裏からずっと仏光寺の所まで空地になつていて、その家を潰して高射砲陣地にした。その時に優秀な高射砲を入れたと聞いてましたので、とつとこ、とつとこ撃ちますが高射砲は真上には撃てんですね。従って、うちの家には残物が落ちてこなかった。高射砲には斜めに撃つと七千メートル位しか上がらないので、B 29はようわかつていて、その当たる所を避けて通る。計算があ

るんでしょうね。射程距離の所には全然B 29は来なかったということです。そういう怖い思いをして、やれやれと思いました。硫黄島が占領されて、B 29が飛んでくるようになった。硫黄島が落ちるまでは爆撃はほとんどなかった。ですから戦争と言っても、飛行機は来ない。硫黄島が落ちてから、艦載機みたいな小さな飛行機がどんどん来まして、これが銃撃するんですよ。そういう目に遭いました。自分の荷物を田舎に持っていくのに車を押していく時に銃撃にどつと来る。硫黄島が落ちてから、これはあかんという感じでした。

戦時中に、私より三つか四つ下の人は全部田舎へ学童疎開した。だから、爆撃にきたのを覚えていない。知らんのや。私らは疎開もなく、他の軍需工場にアルバイトに行つてるといふ状況ですから、家から通っていた。あの自分、いわゆる重工業に行つた所は、爆弾もよく受け落ちましたし、だいたい死んでます。でも、我々の同級生で亡くなったのは一人だけでした。そのような嫌な目におうてます。戦争は嫌ですね。ただ、沖縄のように地上戦がなかっただけ、非常に助かったという感じです。

どこの家でも防空壕を掘ってましたが、防空壕の下に水が来るんですよ。それを砂で埋めて、その上にムシロを敷いてました。家の下に掘るんですよ、家の中におったら出口がないでしょ。そやから、表の道路に穴を掘って、そこへ出られるようにしました。ただ、この付近はまず、石炭ガラが出まんねん。それと綺麗な砂が出まんねん。それから水が出まんねん。そんな状況で防空壕を掘りました。

我々の年代では、一番損した役割ではあります。それより昭和八

九生まれは学童疎開に行つたので、空襲そのものを知らないというような状況で、怖い目にはおうていなかったと思う。

私は三国に行つてましたが、電車に乗つて行つた。十三又は中津まで歩かないと、電車が出たり入ったりするんですよ。たいがい中津まで歩いて、阪急電車に乗つて三国へ行つたというような状況で戦争って嫌なもんですね。

一番怖い目におうたのは我らの年代ですが、疎開先から帰つて来た時に、焼け野原になつてるとね、やっぱり、どこへ行つたらいいかわからんですよ。ただ焼け野原の中で、家族の人が柱にこちらへ行つてるといふ紙を貼つてまして、自分の家はわかるので、そこへ戻つたらそんな紙があつたので、そちらの方へ避難した。空襲なんかで死ぬ人は、あんまりなかったようですね。ただ、防空壕の真上に焼夷弾が落ちた時にね、防空壕の中へどんと落ちる。私の親戚でも御影の立派な家の庭に防空壕を掘って、そこへ避難したら、その中へ落ちて全滅でした。今後そういうことはないでしょうけど、つらい目に遭いました。

〈中略〉

阪神電車は国道を走つてました。神戸まで走ってるんですよ、あれに乗ったことは、よくあります。悪い子でしてね、あの時分車掌がおつて、筒の中に使つた切符が入つておる。車掌はチンチン電車の中を回っている。それを取つて持つて降りるんですよ。どこまででも行けるんです。国道線が越えてた淀川大橋に爆弾を落としたけど、当たらなかった。ただ、淀川大橋を守るために、両側に高射砲陣地がありました。今の店の前に高射砲陣地がありまして、橋を狙つて爆撃するも、

なかなか当たらん。上から落とすも6千〜七千メートル上から落とすも当たる訳がない。伝法大橋もそうなんですよ、高射砲陣地がありましたね。

あれが出来た時は、新橋筋と他の住宅も全部潰すと言われたら、あの時分仕様がない。そこを空地にして陣地を作った。あれは七門あったが、今の郵便局本局の真裏です。そこから清立市場・中江町市場の所まで空地にしまして、家を潰すのに動員されて行きました。立派な高射砲陣地でしたよ。あれが野里にもありまして、国道の重要路線を空襲されたらどんならんし、爆弾で橋が潰れたら、流通が問題になる。

戦争のために我々が一番損した方です。ただ、私より四つか五つ下の方は、皆学童疎開してますから、戦争の怖さを全然知らんけど、疎開という制度があったから、皆無事で帰って来てます。

阪神の北側の西淀川区は、今あいあいセンターがある向かいが区役所でしたけど、代書屋さんがようけ並んでいました。私の友達にも代書屋の息子がいました。申請書を書けない人がようけいてた。戦争中で無学の人が非常に多かったのでは。そういう商売があった。ついこの間まで、この区役所の前にありました。落語のように、今のあいあいセンター付近には代書屋が五〜六軒あったのでは。昔の人は字を書くのを嫌ったのか、大開の方に工場が多くあったので、田舎から出てきて工場に勤めるということが無学の人が多かったのではと思います。

あの時分は夜が楽しかったですね。夜に淀川の堤防で寝転がって、

一夜を越したことがよくありました。学校が動員して、どっかの工場にパートで行くと、飯は食えますからね。皆、募集で行って、そこで淀川の堤防で寝転んで夜を越すということはよくあった。帰って家で飯を食うことは負担になる、親にね。孝行したようなもんですな。日本アルミとか行っていると、配給が沢山あるんですよ。砂糖なんか山積みしてある。ちよつと突いたらダーと出てくる、それを持って帰ってました。

福島という所はええとこですよ。私も商売柄各区をほとんど知ってる言えます。此花区より福島区はええですな。此花区は戦後すぐに水害がありまして、ジェーン台風（註・枕崎台風？）やったかな。西九条で天井まで浸かったんですよ。天井まで浸かったら、どうにもならんですね。あの時分は台風がよう来た。家は空家にするすると、すぐに痛んで潰れてしまいます。どういう訳か湿気がいるんですね、家を保たすためには。空家でほっといたら、ガタガタになってますわ。その点、長屋は良いですよ。長屋はほっといても、もたれ合う。潰れてしまうことはないんやな。長屋の四軒が支えている。その家買うても修繕できる形やない。それ潰したらエライこっちゃ。潰されへんか

ら、いつまでもた建っている。持ち主も困るわね。家はなんぼ痛んでも、人が住めば大丈夫です。

昔はメリヤス屋がどの長屋でもあって、ダニが多いし何やかや苦労した。最近、メリヤス屋がなくなつたから、迷惑を掛けられるようなことはなかった。長屋とかで事業をしている人で、昔旋盤を使って鉄

工所やってましたからね。そういう人たちは、ほとんどいなくなったなあ。やるのは勝手ですけど、自分の家ですよ。そういうことで人に迷惑を掛けるということがあると困りますね。

此花区に比べれば、福島区はええとこです。こんなこと言うたら、此花区の人に怒られる。

阪神の北側の西淀川区は、御幣島や佃まであったんです。それが、西淀川区の区役所が海老江にあった、今のあいあいセンターの前に。何かするために海老江まで来なければ。その時分、区役所まで自転車で来るのは苦勞しなかったが、海老江が中心地であるという感じがす。これは聖天通のお陰です。聖天通が、海老江の淀川大橋の手前まで商店街として繋がってました。私らが聖天さんに行くとすると、百貨店に買物に行くような感じで、あの聖天通、福島駅から斜めに始まりますけど、あそこを通っていくと賑やかだね。親が連れて行ってくれるんですけど、あそこへ行くのが好きでした。このような状況が思い出される。海老江の区役所のあった所まで商店街が並んどつた。あそこに日本ペイントかがあって、その塀に沿って商店街がずっと並んだ。その塀に沿って、色んな商売家がありました。ざる、金物とか日用品を売ってるような、それで現在のあいあいセンターの所まで、繋がってました。その時分には、聖天さんを境にして、聖天川が現在の区役所の前を通っている川ですが、その川の右岸が西淀川区で左岸が此花区、聖天さんのちよつと向こうは北区という感じで分かれてました。

従って西淀川区は非常に広い。歌島公園まで、グリコの所まで、と

にかく塚本の手前まで、ずっと西淀川区でした。私らも自転車やスクーターなりで通ったんですが、昔は材料が沢山あって、佃から吹田まで若いから自転車で行ってましたが、淀川大橋を渡るのに坂道なので、押して行かなくてはならず大変でした。

野里に一時住んだことがありまして、野里から野田阪神まで三銭なんですすよね。三銭もろうて、電車に乗らんと歩いて帰って三銭儲けてね。それと淀川大橋から野田までの間の国道二号線に商店がざあっと並んだ。今の新橋筋みたいに賑やかな商店が、ようけありまして、食べ物を扱うよりも、例えば、縄とか家具類とか鍋とか釜とか、そういう物。野田阪神から淀川大橋まで、商店がずらっと両側に揃つとつた。ですから、海西小から淀川大橋まで商店があり、色んなものを売ってましたから、歩いて通ったんですが。あの頃は一番海老江の綺麗な所でした。というのはね、

堤防がね水害がありまして、その時、水がかなり溢れた。下の中津運河を越えて、あの時分の堤防は非常に綺麗な所で、桜がよく咲きまして、桜の時分にあの堤防は桜に飾られたという感じがした。ただ、大水が来た時に堤防を越えた。これはいかんということで、そこへ二メートルほどかさ上げしよつた。桜も何もなくなつてしもうて、情緒も何もあらへんやね。今の堤防いうたら歩いてるだけやな、二メートルも上げたいうからな。橋の手前の所に鉄柵の扉があるやん。台風が来て、水が溢れるよとなると、水防団がそれを閉める。昔やったら桜が綺麗に咲いたら、私らもよう遊びに行つたもんや。それと同時に中津運河もなくなつとんな。あの運河へ魚釣りにね、カスミ網みたいな

ものを持って行って、ようけ小さなモロコを獲って帰りました。あそこは綺麗な運河でしたから。その中津運河の横の堤防が二メートルも上げやがって。芦の所を全部コンクリートで、何の情緒もない。私ら子供の時分、今の江成町に住んでましたけど、よく芦の原に遊びに行つて、ジャコを獲ったり、シジミを採ったりしてました。

シジミは栄養がなかったら育たない。右岸の野里で採ったら、本当に小さなシジミで、身がほとんど入ってない感じのやつ。左岸は大きいですよ、下水処理場があるでしょう。下水を処理して流すのですが、シジミはこちらの方が大きい。向こうで採ったら本当に小さい。食べるところがない。そんな遊びをしました。又、芦が生えた芦原で水が流れてるので、小さな魚を獲ったりして、子供の時分はよう遊んだものです。とにかく、水の満ち引きが分からない時があるんですよ。あそこにどんどん流れて来るとね、堤防に沿ったところはかなり深い、堤防からちよつと離れたら芦原になって割りに浅いんです。ですから、満ち潮の時は、今度深い所を渡らないかん。これが歩いて渡るのが大変なんです。ただ、芦原で遊ぶ時に、そろそろ水が増えてきたら、満ち潮だと分かるようになった。ああいう遊びも今の人はだけへんと思う。可哀想ですね。ただ、溺れる人がチョイチョイあって、河川で遊んだらあかんと言われますけど、海西小の先生は見回りにけえへんから、ハイハイ言うといったら、芦の中でウロウロしましたけどね。今、魚釣りするのが、川のそばまで行ってするくらい。シジミは左岸の方が大きい、野里の方は小さい。下水処理場が濾過して、毒のない水が流れてきたら、栄養があるのでシジミが大きくなる。あれか

ら伝法にかけて大きなシジミが採れましてね。淀川大橋より上の方を来ると、小さなシジミしか採れん。大阪の下水を集めた柴島より、こちへ流して来る。野里(右岸)は大きなシジミはなかった。しかし、先生は子供に行つたらいかんと言われてましたけど、恐いもの知らずですよ。死ぬなんてこと考えへんからね。

メダカを獲ったりしたが、今は何も獲れませんね。川の岸でハゼを釣っているようですが、あまり釣れませんね。

淀川大橋に行くと、橋の上から色んな魚釣ってました。ボラというよりイナというやつが獲れる。橋が高いもんですからね、引っかけて上に上げて落とす、素人では釣れず。しなりのある竹の竿でも釣れない、船津橋の方はよう釣れるんです。あそこは高く上げないでしょう。川がそこやから、上げてすぐ獲れる。淀川大橋では、上に上げるまでが大変やね。そやから落ちてしまうということになる。

司会 ぼちぼちお時間ですので。

高瀬 あまり良いこと言えへんかったけど、楽しい思いをしたと、ご勘弁を頂きたい。有難うございました。
(拍手)

司会 長時間にわたり有難うございました。どうしても、訊いておきたいことがございましたら、一つ質問を。

西田 さつき出てきた聖天川というのは、北港通の所、区役所の前のあそこは、昔から聖天川と呼んでいたのですか？

高瀬 あれは聖天川、本郷さんの方から流れて来て、前の所を流れていた。あれが境で地域が変わっていた、あれがなくなったら道だけ残った。大きな土管を入れまして、下水を処理するような施設にした。私が昭和一三年に来た時には、この川を埋め立てて、すでに上に土が山盛りになってた。だから、土管を入れたあとやったと思います。

司会 時間も時間ですので、最後に末廣顧問どうぞ。

末廣 今日はどうも懐かしい話、有難うございました。宮本さんとの間も寄せて頂いて、今日やっと実現させて頂いたんですけども。本当に正直言いまして、高瀬さんには我々歴史研究会が、ものすごくお世話になってるんです。それは金銭面でお世話になっておりまして、もう今年で、我々の歴史研究会が出来て、四三年、四四年目ぐらいになってるんですけども、一三年、一四年前に我々の記念誌を作った訳ですね。その時、高瀬さんが福島区コミュニティ協会の会長をしておられてですね。我々折角この記念誌を作るんだったら、福島区の皆さん方に知って欲しいということで、お願いに行ったら「おう分かった、四百冊買うたるわ。」ということでした、あの福島区の新年互礼の時に、各町会長とか偉い人が来られてる。平成二四年の正月でした。その後、また二年後にですね、ちよつと訂正とか加筆とか修正したやつで、また我々発行したやつを、「よっしや、又それも買うたる」ということですね、実は八百冊をですね買って頂いて、その財源がですね、今でも正直言って、我々の基本になってるということは、大変有難いことです。補助というか助成というか、心から感謝しております

て、又今日は懐かしい話を聞かせて頂きまして、本当に有難うございました。ひとつ、まだ九五と言わんと一〇五、一二〇と生きて頂きましたように、心から願って御礼申し上げます。本当に有難うございました。

〈拍手〉

司会 最後にもう一度、拍手で感謝の意を表したいと思います。

以上をもちまして、本日の講演会を終わらせて頂きます。

*講演の中に講師のご出身である大阪弁が、随所に見られますが、極力その通りに記述しました。また、ですます調に統一せず、こちらも言葉通りに表記しました。

(中略) とした部分は、内容が重複しているためです。

古い写真を探しています

お手元のアルバムに、災害や今はない建物などが写っているものがあればご提供ください。

展示などに活用させていただきます。

—堂島川を往来した文人官吏

澤田耕作

12

わたの原 八十島^{やそじま}かけて 漕^こぎ出でぬと

人にはつげよ 海人^{あま}の釣り舟

『古今和歌集』 羈旅^{かりよ}（旅の意）・四〇七）

歌の意味は「広い海原をたくさん島々を目指して漕ぎ出してしまったと、都にいる人に伝えておくれ、漁師の釣舟よ。」

隠岐へは、摂津国の難波（大阪府大阪市）から瀬戸内海を通る船旅になるが、これはその船旅を思つて詠んだ歌です。

小野篁は遣唐副使としての嵯峨上皇の勅命に背く行為をしたために、官位を解かれ、隠岐国（隠岐の島。伊豆・安房・常陸・佐渡・土佐の五か国と共に、もつとも重い遠流^{おんる}（流刑の意）の地）へ流罪となる承和五年（八三八）のこと。その航路は、京都↓淀川↓瀬戸内海↓関門海峡↓隠岐島（島根県）である。後に許され、京の都に戻ってから参議（左大臣・右大臣・大中納言に次ぐ重職）に就任、当時第一級の学者で、優れた漢詩人でもあった。また遣唐使小野妹子の子孫と云われていた。

因みに、私は、昭和五〇年の秋に境港から二千トンのフェリーで隠岐の島へ渡りました。晴天なのに、甲板では手すりの鎖を握らなければ海へ飛ばされてしまいそうな大きな横揺れでした。小野篁も、中世の後鳥羽院や後醍醐天皇も、大海に浮かぶ木の葉のような木造の小舟で島流しになられたのだと、しみじみ感じました。又、平成の初め頃には二〇数名の神職等と、チャーター船で福岡県の沖合六〇kmの玄海灘にある宗像大社の沖津宮に渡りました。その時、遣隋使や遣唐使の渡航がまさしく命懸けだったことを実感しました。

○菅原道真 承和一二延喜三年二月二五日（八四五〇九〇三）【主に宇多天皇に仕える】

学問の神様、梅を愛でる、 福島の地名をつけたと伝承のある人。

東風吹かば 匂いおこせよ 梅の花

あるじなしとて 春を忘れそ

菅原氏は、もと土師氏^{はじ}（土器や埴輪をつくる集団 渡来系）。土師氏より菅原氏への改姓は、桓武天皇の即位の初め、天応元年（七八一）六月、土師宿禰^{すくね}古人^{ふるひと}ら一五人の請願によつて、聴許^{ちようきょ}（訴えや願いをききいれて許すこと）せられたもの（『続日本紀』）。

桓武天皇の外祖父が土師氏出身であつた。延暦九年（七九〇）一二月、桓武天皇の母、皇太夫人高野新笠^{たかののにかさ}の父高野乙継^{おとつぐ}・母土師真妹^{まいも}に、それぞれ正一位を追贈し、土師氏に大枝朝臣^{おおえあそん}（朝臣は氏の下に付ける高身分人の敬称）・秋篠朝臣・菅原朝臣などの朝臣の姓^{かばね}（氏そのもの）を許した。（高野新笠の母の家は大枝朝臣）。菅原の氏名は居住の地名をとつたもの。大和添下郡菅原郷（和名抄）で現在の奈良市菅原町です。

●「道真^{みちまこと}加冠^{かかん}（成人式 武士の元服に相当）の時」母の詠んだ歌

ひさかたの 月の桂も 折るばかり

家の風をも吹かせてしがな

（拾遺集卷八・四七三）
道真が試験に及第して父祖（古人^{ふるひと}・清公^{きよきみ}・是善^{これよし}）の業を継ぎ、しっかり学問を続けて国や社会の発展のために尽くしてほしい、という願いが込められた歌。「桂を折る」とは、官吏登用試験に及第して進士

(文章生)や秀才(文章得業生)になることを意味する。

中国の隋以来、科挙(官吏登用試験)に合格することを「折桂」と言ったが、この漢語を「桂を折る」と訓読して詠んだもの。

・阿衡(中国古代の人臣最高の地位)の紛議 仁和三年(八八七)

一月から翌年四年一〇月の政争。仁和三年一月、宇多天皇は即位式をあげ、その直後、時の摂政太政大臣藤原基経に対して「それ万機巨細(政治上の大きな小さな事柄)(中略)みな太政大臣に關白(上申する)し、然る後に奏下(下々に布告する)すること一に旧の如く(先帝の時のように)せよ」という詔(天子の命令)を下した。これは宇多天皇即位早々、藤原基経を引き続き關白の職に任ずる詔勅(天皇の意志を表示する文書)を下します。藤原基経は当時の作法にのっとりいったん辞退しました。その後、宇多天皇は当時最高の学者と云われた左大弁兼文章博士橘広相に勅答の文章を書かせます。内容は「宜しく阿衡の任を以て卿が任となすべし」の文句があった。ここから紛議がはじまった。しかし、この文章に藤原基経の側近、文章博士藤原佐世が噛みつき、「だまされてはなりません。阿衡とは位が高いだけで実権のない名誉職です」と進言。勅答の起草者橘広相と藤原佐世(道真の娘婿)以下の学者たちとの間の果てしない論争に発展し、学界・政界を巻き込んだ政争となってしまった。広相は文人派官人の巨頭であった。宇多天皇・橘広相と藤原基経・藤原佐世の対立構図になってしまった。

当時、讃岐の守として任国にいた菅原道真はこれを聞いて事態を憂し、解決の為に奔走した。かくするうち天皇と広相は政・学界の中で

孤立し、ついに詔を改めるといふ非常措置により收拾を図ったが事は容易におさまらず、広相はその責任を問われる立場に追い込まれた。

最終的には基経の娘穂子の入内(中宮・女御として内裏に参入すること)で事態は落着いたが、事件を通して基経らは摂関家の立場を強化し、文人派官人を圧服することに成功したといえる。(弥永貞三 日本歴史学者)この時道真の奔走に宇多天皇は厚く信頼を寄せる大きなきっかけになった。

・菅家廊下 平安時代前期に清公・是善・道真と三代にわたって文章博士を輩出した菅原氏の私塾のこと。元来は菅原氏当主の書斎であった「山陰亭」で講義が行われていたが、生徒の増大につれ、廊下(寢殿造の中門廊)で講義が行われたことから、そう呼ばれた。

・配流の宣命と大宰府での状況 (昌泰四年=延喜元年)

昌泰四年(九〇二)正月二五日、「諸陣警固し、帝(醍醐天皇)南殿(紫宸殿)御したまひ、右大臣従二位菅原朝臣を以て太宰権師に任じ・・又、権師の子息(高視・景行・兼茂・淳茂)等、各々以て左降(低い地位におとすこと)」「『日本紀略』という異常な人事が行われるに至った。

その時の宣命(『政事要略』所収)には、左遷理由を次の如く記している。

④右大臣菅原朝臣、寒門(低い家柄)より俄に大臣に上り収り給へり。而るに止足(とどまること)の分を知らず、専権(権力をふるうこと)の心あり。佞諂(こびへつらうこと)の情を以て前上皇の御意

を欺き惑はせり。

◎然るを、上皇の御情を恐れ慎まで奉行（命令を受け執行すること）し、御情を敢て怒る無くて、廃立を行なひ、①父子の志（慈？）を離間（仲たがいさせること）し、②兄弟の愛を淑破（善良なさまを壊すこと）せんと欲す。

（参考）①宇多上皇と醍醐天皇は親子、

②醍醐天皇と斎世親王は異母兄弟

輝かしい道真の隆盛：、左大臣藤原時平にとって目障りな存在、道真を妬む学者や出世を阻まれた皇族出身者たちと組んで左遷を企てたというのが通説である。

・大宰府での状況は辛酸を極めた

「九月十日」延喜元年（901）九月十日夜、大宰府に流された時の作

去年の今夜清涼に待す 愁思の詩篇独り断腸

恩賜の御衣 今此に在り

捧持して 毎日余香を拝す

解釈 去年の今夜は清涼殿に仕えていた、他の臣たちとともに

「秋思（秋をおもう）」の詩を作り、自分の詩だけが腸もちぎれんばかりの悲しい思いに溢れていた。そのとき賜った御衣（天皇を敬ってその衣類）はいまここにあり、日ごとに捧持（ささげてもつこと）して移り香を拝し、天恩の厚きを感じ入っている。

○紀貫之（？）九四五年

最初の勅撰和歌集『古今和歌集』（延喜五年）延喜一四年頃成立の）編者（紀友則・凡河内躬恒・壬生忠岑）の一人（何れも三十六歌仙）。仮名序の作者。日本初の平仮名文日記文学『土佐日記』の作者。作者を女性に仮託（他の物事を借りて）。平安時代の代表的歌人の一人。それまでは、私的な場面でのみ使われていた平仮名が、正式な日本語表記文字として決まったのは『古今和歌集』から。

○日本語表記の文字

日本人が元来固有の文字を持たなかったので、外国語文字である漢字を用いて日本語を表記した。漢字のことを「真名・真字（仮名に対しての漢字のこと）」と呼ぶことがある。漢字は「形・音・意味」をもつ表語文字である。この漢字を借りて日本語を書き表した。それがカナ（借字・仮名）であるが、大きく「真仮名（万葉仮名）・平仮名・片仮名」の三種類がある。

● 真仮名（万葉仮名）ーマ（完全な・立派な） 仮名の意。字形が完全で立派。公的、正式な日本語の表記の場合では漢字（真名・真仮名）が用いられた。

● 平仮名ーヒラ（並みの・普通の） 仮名の意。消息・（恋）歌・日記など私的場面で用いられた。男女ともに用いた。後世、「女手」ともいわれることもあったが、女性専用の文字という意味ではない。

● 片仮名ーカタとはマの対義で、不完全な、の意。漢文訓読の

世界で記号的・付属的に用いられた。

二 終わりに

以上がセミナーの内容です。紀貫之以降は時間の都合で、出来ず、配布資料に基づいて報告をしました。講師の方が、菅原道真と天皇・公家との関わり、「皇族・貴族関係略系図（所功『菅原道真の実像』より）」と「皇室略系図（『日本古代史辞典』）」を使用し、繰り返し説明、テーマとも少し離れた内容、予備知識がないとわかりづらいものでした。



第一回セミナー



第二回セミナー

歴史と水郷の村 海老江

―二〇二五年第二回セミナー報告―

藤田由紀子

日時 六月二日（木）午後二時～四時
会場 福島区民センター 三〇一・三〇二号室
講師 末廣 訂氏（福島区歴史研究会顧問）
参加者 五二人（一般三二人、会員二〇人）

複数の海老江の古い時代の地図が、スクリーンに映され海老江の地名が登場した戦国時代の話からスタートした。

一 水郷の村と生活風景

江戸時代初期に尼崎藩の一行が、海老江で鷹狩を行ない、この時、地元民が、殿様に対応したことをきっかけに、尼崎での道意新田の開発に繋がり、今も道意の地名が。尼崎にあるらしい。

江戸時代から、明治の初期までは、人口千人余りの純粋な農村で、村の中に多くの井路川が流れ人々の生活に利用される水郷の村であった。

二 新淀川開削による変化

明治一八年（一八八五）の大洪水を機に、大阪全体のために、今の私たちが知る新淀川の開削計画が当時の国会を通り、明治四二年まで、一〇数年をかけて、国の大事業として行われた。

このため海老江の三分の二は川底となり、一部は対岸の町として分かれてしまった。

新淀川に沿って、開削工事で出た土砂の運搬に使われた中津運河が併行して完成した。その後、川沿いにできた。多くの工場が、これを運送に利用した。薬品・ガラス・インクなどの工場が進出してきた。

大正から昭和の初期にかけて、工業の発展に合わせ、多くの工場労働者のための住居が必要となる。井路川は埋められ、長屋ができる。さらに交通の発達で、人口は大いに増加した。

太平洋戦争の被害とその後の復興で道路の拡幅、いくつもの公園ができるなど町の姿は多く変化した。

近年、いくつかの工場が転出し、その跡地には、大型店舗やマンションが建てられ、人口は増加している。

その海老江の名が、一躍有名となったのは、JR東西線の開通で、新たにできた駅名に採用された時である。

三 伝統行事を守るむずかしさ

変化の激しい、海老江の地ではあるが、変わらず、守られているものもある。大阪府指定無形文化財に指定されている八坂神社の宮座神事がある。数百年前から続けられ、終戦の、昭和二〇年の一二月にも、途切れることなく続けられている。

宮座とは、八坂神社の神様にお供え物をする。そのための準備や行事である。定まった物を買ひ、調理し、定まった形式で神前に供える。

確かに、年末に、何日も神社のために時間を割くことは、現代人に

は辛いことだろう。協力できる人も減る。また、神前に供えるべき多くの物は手に入りにくくなってきている。伝統行事を続けてゆくことがむずかしくなっていることが想像できる。

八坂神社には、宮座神事の他にも、祭りもある。これも維持がたいへんであるということだ。

講演冒頭に、大阪歴史博物館制作の宮座神事のビデオ映像が上映されて、わかりやすく、理解が深まった。

四 新たな課題と発展

海老江には歴史と水郷の村から時代の変化に対応してきた村人の努力と新たな課題もある。

その一は、広大な工場の空き地に市バスの営業所が移転という。地元が知らない間に大阪メトロと凸版印刷との土地契約がなされており、思わぬ課題に直面していること。

その二は、現在すでに万博用道路として利用されている淀川左岸線がある。それに沿って市の道路が淀川大橋から地元海老江に出入り口が計画されている。これも地元の頭痛のタネであるとは講師の弁です。

五 合同セミナーを受講して。

私は大阪の他の土地から、かつて田か畑であり、その後工場となり、今マンションとなっている海老江に移り住んで来た者です。初めて八坂神社界隈を歩いた時、時間のねじれに迷い込んだような錯覚がありました。今回のセミナーに出席して、地元の様子や課題が少しは、分かったように思いました。

大阪の歴史と古道

―二〇二五年第三回セミナー報告―

中堂 眞理子

日時 一〇月七日（火）午前一〇時半～午後〇時一五分

会場 福島区民センター 三〇一・三〇二号室

講師 大澤研一氏（大阪歴史博物館館長）

テーマ 「大阪の歴史と古道」～梅田街道を中心に～

参加者 五八名

楽しみにしていた「大阪の歴史と古道」のセミナーが開催されて、当日は定員以上の参加者があり、大盛況でした。

講演内容は次の通りです。

道は重要な文化財であり、しかし記録に残りにくいため、歴史に跡づけするのは、容易ではなく、したがって地域内でのように機能したかを明らかにする必要があります。

今回は梅田街道がメインで、道は平安期から鎌倉期にかけて形成されたと思われ、やがて街道は商業や文化交流の場となりました。

軍政の移動に伴う近道の必要性が生じたり、村や寺院の成立が道筋に影響を与えました。また、歴史資料の解釈は明治三六年（一九〇三）の『大阪府誌』と平成一六年（二〇〇四）の解釈版で時代ごとに表現が異なることがあるため、道の成立と機能は時代背景と社会的要因によって変化しています。

『大阪府誌』に記された福島区の主要街道について、梅田街道は大坂へ至る道、尼崎に通じる道など、見る側によって名称が異なります。大和田街道は明治期に尼崎へ通じた物流道路であったと記されているため、地域内の物流の要として機能していました。

一六世紀の絵図から、佃渡しや野里渡しの記録が梅田街道沿いに見られ、また梅田街道周辺の集落と御幣島に寺院が存在していたこともわかります。

さらに御幣島遺跡からは奈良、平安、中世の遺物が散布していることが示されています。

本道として中国街道が成立し、五世紀ごろ難波や金楽寺沿岸州を通る街道が大坂湾沿岸に形成され、その後、中国街道に続いて梅田街道と大和田街道が整備されました。

街道ができた過程が興味深く、現在と比較するのが面白いです。

アンケートでは、「街道をたどりたい」という要望もあり、歴史的な街道を巡るイベントが企画されました。大澤館長も参加されて、一月三〇日に実施しました。



〈写真〉 大阪市場線最後の日 さようなら「ぎんりん号」

1985. 3. 14 映光社提供

①



②



③



④



⑤

①②は中央卸売市場内

③④は路上

⑤は旧事務棟

福島区歴史研究会 会則

(名称及び組織)

第1条 この会は「福島区歴史研究会」と称し、郷土の歴史を愛好する者をもって組織する。

(目 的)

第2条 この会は歴史を学ぶ事を通じて、私たちの身の回りの過去と現在、そして未来の郷土を考える事を目的とした歴史愛好家の「広場」である。

(事 業)

第3条 この会は前条の目的達成のため、次の事業を行う。

- 〔1〕 郷土福島区の歴史と史跡の研究
- 〔2〕 資料の収集と調査
- 〔3〕 史跡・文化財などの見学
- 〔4〕 活動の成果の発表及び記録の作成
- 〔5〕 この会の目的のために必要な事業

(役 員)

第4条 この会に次の役員を置く。任期は2年とする。但し、再任を妨げない。

会長・副会長・幹事長・会計・会計監査・顧問・幹事

なお、事情により任期務途中での交替がある時は、後任者の任期は前任者の残りの期間とする。

(役員の職務)

第5条 〔1〕 会長はこの会を代表し、会務を統括する。

〔2〕 副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときはその会務を代行する。

〔3〕 役員は年間計画の立案、この会の円滑な運営のための諸事業を企画及び実行する。

〔4〕 幹事長はこの会の会務全般を処理する。

〔5〕 会計はこの会の経理を統括し、総会で年間の収支を報告する。

〔6〕 会計監査は経理を厳正に監理・監査する。

(総会及び役員会)

第6条 〔1〕総会は年1回以上開催し、会長が座長をつとめる。役員の選出、会全体の活動方針や重要事項の報告・確認を行う。総会は会員の半数以上の出席で成立し、出席者の過半数の賛同により、総会の決議事項とする。

〔2〕役員会は年1回以上開催し、重要な方針変更、予算、計画立案等協議する。役員の半数以上の出席により成立し、出席者の過半数の賛同により、役員会の決議事項とする。なお、他の会員、専門家の出席を求めることができる。

(事務局及び事務局長)

第7条 本会の事業を円滑に行うために事務局を置く。幹事長は事務局長を兼務し、会議の準備及び議事録の作成、会員名簿の管理、会員相互の連絡、広報及び活動記録の作成などを行う。事務局は事務局長宅内に置く。

(企画会議)

第8条 事務局長は総会、役員会で決定した事業の具体的実現のため企画会議を主催する。企画会議には会員及び関係者が出席できる。また、必要に応じて細目を検討するため事務局長のもとに部会を設けることができる。

(会費及び会計年度)

第9条 この会の経費は会費（年額3000円）及び賛助金などをもってあてる。

会計年度は1月1日より12月31日までとする。

なお、1年を超えて会費を滞納した場合は会員資格を失う。

(実施要綱)

第10条 本会の事業の実施について、必要な事項は別に定める。

(その他)

第11条 〔1〕この会での活動により得られた情報、成果はこの会に帰属する。

〔2〕会員が死亡した時は、シキビまたはこれに替わるもので弔意を表す。

付則 この会則は平成21年2月22日より施行する。

平成24年2月18日一部改正

2025年の事業

『福島区歴史研究会会報 第18号』2月発行
あいあいまつり 2.8 展示など 会場・福島区民センター
展示「海老江の今昔」 ～3.31 会場・福島区役所
第1回セミナー「堂島川と文人たちー堂島川を往来した文人官吏ー」2.23
講師・白江恒夫氏 会場・福島区役所
展示「戦後80年」3.21～7.18 会場・福島図書館
展示「ノダフジの今昔」4.14～9.30 会場・福島区役所
第2回セミナー「歴史と水郷の村 海老江」6.12 講師・末廣訂氏 会場・福島区民センター
展示「上福島・福島の今昔」7.18～10.16 会場・福島図書館
福島区民まつり 10.4 展示・クイズなど 会場・下福島公園
第3回セミナー「大阪の歴史と古道ー梅田街道を中心にー」10.7
講師・大澤研一氏 会場・福島区民センター
福島ふれあいまつり 10.11 展示・クイズなど 会場・福島小学校
展示「戦後80年」10.13～2026.3.31 会場・福島区役所
『野田村歴史まちあるき』12月発行

2025年の活動記録

- 1.16 企画会議
- 2.17 海老江東小学校6年生に「戦争体験の話」(講師・末廣 19回目)
- 2.20 役員会
- 2.23 セミナー懇親会
- 3.2 総会・懇親会
- 3.20 展示準備(図書館)
- 3.20 企画会議
- 4.11 展示撤去・準備(区役所)
- 4.17 企画会議
- 4.25 講演会 高瀬善方氏が語る会
- 5.15 企画会議
- 6.19 展示撤去・準備(図書館)
- 6.19 企画会議
- 6.26 海老江東女性会の会合で「海老江の歴史」について講演(講師・末廣)
- 7.17 展示撤去・準備(図書館)
- 7.17 企画会議
- 9.18 企画会議
- 10.10 展示撤去・準備(区役所)
- 10.16 展示撤去(図書館)
- 10.16 企画会議
- 11.20 企画会議
- 11.30 梅田街道散策9.19 企画会議
- 11.21 企画会議
- 12.11 勉強会「戦国時代・天文前期の野田村考」(講師・藤)
- その他三好長慶関係活動への参加など
- 福っくらトーク〔協力〕2.1 3.1 4.5 6.7 7.5 9.6 11.1 12.3

ホームページ <http://o-fukushima.com/rekishi/top.htm>
(会報にバックナンバーも掲載)

(印刷：谷口印刷紙業)